筑波大学社会・国際学群国際総合学類

卒業論文

地域ナショナリズムにおけるシンボルの機能

―スペイン・カタルーニャ州の「人間の塔」を事例に―

2016 年 1 月

氏　　名：小島彩

学籍番号：201110365

担当教員：関根 久雄 教授

目次

第１章　序論 1
１．問題意識・問題設定 1
２．研究方法 5
第２章　ナショナリズムとシンボル 6
１．ナショナリズムへのアプローチ 6
２．シンボルの機能と特徴 8
第３章　人間の塔とは 11
１．人間の塔の概要 11
(1) 人間の塔の発祥 11
(2) 人間の塔の規則と種類 11
(3) 塔の各部の名称 13
(4) 服装 15
(5) 音楽 15
２．「バルセロナ人間の塔の会」（Castellers de Barcelona）について 16
(1) 組織 17
(2) 紋章と上着の色 17
第４章　地域ナショナリズムと人間の塔 18
１．歴史的関わり―伝統舞踊サルダーナとの比較を通じて 18
(1) 19 世紀から 1939 年まで 18
(2) 1939 年から 1951 年まで 22
(3) 1951 年から 1961 年 26
(4) 1961 年から 1972 年 27
(5) 1971 年から 1981 年 30
(6) 1981 年から 2000 年代 33
２．現在のカタルーニャにおける地域ナショナリズム―「地域ナショナリズム＝民主主義」論の台頭 35
３．考察―人間の塔に何を見出すのか 40
(1) 人間の塔を鑑賞する人々 40
(2) 人間の塔とカタルーニャを結びつけようとするコーリャのメンバー 44
(3) 人間の塔とカタルーニャ・ネーションを結びつけることに反対するメンバー..... 47
第５章　結論 50
１．人間の塔の意味 50
２．人間の塔の理想化とイメージの再生産 51
３．排除という隠れた意味 52

注 55
参考文献 57
Summary 60
謝辞 62

図目次

図１　「8 層の 3 人」 ---------- 12
図２　「6 層の柱」 ---------- 12
図３　各層の名称（『8 層の 3 人』の場合）---------- 14
図４　「バルセロナ人間の塔の会」の紋章 ---------- 17

第１章　序論

１．問題意識・問題設定

近年、EU 各地で、自らが居住する地域をネーションと見なしてその独立を求める、地域ナショナリズムが高まりを見せている。スペイン王国（以下スペイン）のカタルーニャ自治州（以下カタルーニャ州）もその 1 つである。原によると、ネーションとは、自らを特定の社会的共同体に属していると見なす人々によって構成された一つの概念を指す。その構成員は、ネーションに独自性や有価性、政治的主権性を見出す［原 2011:197］。また地域ナショナリズムとは、ネーションを国民国家（ネーション＝ステイト）ではなく、構成員が居住する地域に見出す言説である。このことから、本稿におけるネーションの定義には、国民国家だけではなく、地理的に様々な範囲の地域を含むものとする。なぜなら、人々が自らの所属と考える社会的共同体には、国民国家に限らず、多様な地域が含まれるからである。また、特定の地域をネーションと見なすことから、地域ナショナリズムに支えられた運動は、政治的主権をめぐって国民国家と衝突しやすいという性質を持つ。現在、カタルーニャ州においても、スペインとの政治的対立が、非常に激しくなっている。

カタルーニャでは 19 世紀半ばころから、地域固有の言語であるカタルーニャ語を軸として、スペインと差異化されたカタルーニャ地域を構築し、そこに独自性と価値を見出そうとするカタルーニャ主義が盛んであった。その中で、カタルーニャはスペインとは違う言語と文化を持った実体であるとされる一方で、国家であるスペインの一地方であるとも捉えられていた。人々は、カタルーニャの独自性と有価性を主張していたが、主権性は認めていなかったのである。このことから、本稿ではカタルーニャに独自性と有価性のみを認める運動をカタルーニャ主義、それに加えて主権性を求める運動をカタルーニャ地域ナショナリズムと表記する。19 世紀にカタルーニャ主義を担ったのは知識人や上流階級であったが、20 世紀になると、一般大衆も加わって社会全体の政治運動となった。しかし、1939 年にフランシスコ・フランコ将軍が独裁を始めると、その国家主義思想のもとで、カタルーニャ主義は徹底的に弾圧された。フランコの死後、スペインでは、新憲法に基づき、民主主義と地方分権を基礎とした国家再建が行われた。この結果、スペインは 17 の自治州と 2 つの自治都市で構成された国家

となった。ほかの地域同様、カタルーニャも自治州となり、自治州政府のもとで、新しいカタルーニャ主義が展開された。その内容は、言語を軸としてカタルーニャの文化的特性を主張することで、その独自性をアピールする一方、政治的にはスペイン国家内の一部としてカタルーニャを位置づけようとするものであった。このような状況にカタルーニャの人々は満足しており、スペインからの独立を支持する人々は少数派であった。しかし 2010 年頃から、カタルーニャはネーションとして、政治的主権を持ち独立国家となるべきであるという言説が、人々の間に広まり始めた［奥野 2015:130, 132-133］。地域ナショナリズムの支持者が、急増したのである。スペイン政府は、カタルーニャの独立運動を阻止しようとしているが、様々な政治的駆け引きの末、2014 年 11 月 9 日に、カタルーニャがスペインから独立することに関する非公式な意見集計が行われた。またその前後には、独立を求める大規模なデモ行進も開催されている。さらに、2015 年 9 月 27 日には、カタルーニャ州議会議員選挙が行われた。この選挙は、事実上独立の賛否を問う選挙の様相を呈した。その結果、独立を標榜する統一会派「独立のための共同」党（Junts per Sí）の候補者が、全議席の約半数を占めた。

それでは、地域ナショナリズムを支持する人々の背景には、どのような言説が存在するのだろうか。奥野は、独立の賛否を問う統計とカタルーニャ・アイデンティティについての統計との相関性を指摘する。同州では、独立を指向する動きと比例して、自らをスペイン人ではなくカタルーニャ人だと考える人々、即ちカタルーニャ・アイデンティティを持つ人々が、2010 年頃から急増しているのである［奥野 2015:133］。その理由としては、以下の 2 点が考えられる。1 点目は、政治的要因である。現在スペインでは、右派政党が政権を握っているが、彼らの政策は再中央集権化を柱としている。再中央集権化とは、民主化で自治州に移譲した権限を、再度スペイン政府に戻すことを目指す政策を意味する。スペイン政府は、強力な権限を有するカタルーニャ州に対しても、現行憲法における「スペイン国民のゆるぎない統一」という文言を盾に、強硬な態度で臨んでいる。こうした中央政府の政策に対し、カタルーニャの人々は、自らの政治的権利や文化や言語が剥奪されるのではないか、という危機感を強めている。このことから、現在のスペイン政府の抑圧的な言動が、人々の地域アイデンティティをかき立てていることがわかる。2 点目に挙げられるのは、経済的要因である。未曽有の経済危機に見舞われているスペイン各地域では、失業率が過去最悪を更新しており、人々の生活への不安感は増大している。経済力の強いカタルーニャも例にも

れず、同州内の失業率は、2015 年第三四半期で 17.49%と、高い割合を記録している(1)。これには、自治州政府の経済基盤の脆弱さ、更には中央政府と自治州政府の財政をめぐる不均衡が関係している。そのため人々は、現スペインに組み込まれている限り、自らの生活の安定はないのではないか、と考えている。政治や経済に端を発するカタルーニャの社会的閉塞感は、よりよく公正な新社会を求める、市民の切実な願いへとつながっている［奥野 2015:131-136, 143-148; 山道 2015:10-15］。人々のこのような願いの受け皿となっているのが、独立国家カタルーニャというイメージである。彼らはそこに、自らが理想とする新社会を見出す。山道は、社会の根本からの改革を求める活動を、スペイン全土で盛んになった新しい市民運動の流れに位置づける［山道 2015:13］。また、クルア・イ・ファイネは、ヨーロッパを始めとする全世界で近年活発になった、現在の社会状況に対する不満を表現する活動に、カタルーニャの地域ナショナリズムを位置づけている［Clua i Fainé 2014:93］。

地域ナショナリズムと相まって、カタルーニャのシンボルとして演出されることが多くなったのが、伝統芸能「人間の塔（castells、原義は“城”）」である。これは、人が円陣を組み、その肩に上がった人々がさらに円陣を組むことを繰り返し、文字通り「人間の塔」を組み立てるという芸能である。塔の一番上には子供が登り、その子供が手を挙げたら、塔は半分完成する。そして、その子供が下に降りるのを皮切りに、上にいた人から順に降りていく。この過程で、最後まで人が落ちなければ、その塔は完成となる。人間の塔の組み立てを行う団体は「コーリャ」（colla）と呼ばれ、現在カタルーニャ州内で 90 団体ほど存在するとされる。人間の塔は、現在ではカタルーニャ全土でとても注目度の高い芸能だが、このように人々の耳目を集めるようになったのは、20 世紀後半からである。人間の塔の始まりについては諸説あるが、18 世紀頃現カタルーニャ州南部で始まったという説が有力視されている。その後、19 世紀から 1950 年代にかけては、人間の塔はカタルーニャの一部地域の芸能と考えられており、フランコ体制への抵抗のシンボル、ひいてはカタルーニャ全域のシンボルとはなっていなかった。しかし、1960 年代から、カタルーニャ文化と、民主主義や社会統合を同時に示す伝統芸能として、カタルーニャ全土で実演されるようになり、今日に至っている。そして近年、人間の塔は、様々なイベントを通じて新たな意味が付与されつつあるように思われる。独立支持派のグループが主催したデモにおける人間の塔の実演は、その一例である。このきっかけは、デモを主催する市民団体が、いくつかのコーリャに

実演を打診したことであった。実演の打診は、独立支持派が、カタルーニャ地域ナショナリズムにおける理想像としてのカタルーニャを人間の塔に仮託していること、即ち人間の塔をカタルーニャの政治的象徴に仕立て上げようとしていることを伺わせる。しかし、仕立て上げられている当事者であるコーリャのメンバーは、人間の塔に政治的な意味が付与されていることに対して、様々な意見を持っている。一方では、人間の塔も積極的に政治的イベントに参加すべきと言う人がいる。もう一方では、人間の塔はあくまで文化的活動なのだから政治的行動とは一線を画すべき、と主張する人もいる。政治をめぐる意見の違いは、時にメンバー同士の対立にも発展している。

上述した様々な言説は、政治と文化が交錯する現代カタルーニャで、人間の塔というシンボルにどのような意味を持たせているのだろうか。本稿の目的は、人間の塔にまつわる言説を通じ、カタルーニャの地域ナショナリズムにおいて人間の塔が付与されている意味を明らかにすることである。

２．研究方法

本研究は、カタルーニャの地域ナショナリズムや人間の塔に関する文献・学術論文を中心に進める。また、2015 年 9 月 7 日から 29 日にかけて、バルセロナを中心に活動する人間の塔のグループ、カスタジェルス・ダ・バルサローナ（Castellers de Barcelona）を対象にフィールドワークを行ったので、その結果も使用する。筆者はこの間、メンバーと共に練習や実演に参加した。筆者が参加した練習は計 6 回、実演は 5 回であった。また、練習中や練習後などに、メンバーにインタビューを行い、彼らの意見を聞いた。このインタビューは、メンバーがより普通の会話に近い状態で話せるように、半構造化された形式をとった。

以下に、章構成を述べる。第 2 章では、ナショナリズムを扱った先行研究を概観する。そして、ナショナリズムが内包するシンボルの具体像と機能とそして、シンボルにまつわる言説の分析の重要性を指摘する。第 3 章では、人間の塔とカスタジェルス・ダ・バルサローナの概要を述べる。次いで第 4 章では、人間の塔と伝統舞踊サルダーナを対比させながら、人間の塔がカタルーニャ州のシンボルとなった過程と地域ナショナリズムの歴史を述べる。次いで、地域ナショナリズムの現状を整理した上で、フィールドワークのデータを踏まえて、人間の塔に関わる人々の言説を記述する。第 5 章では、カタルーニャ地域ナショナリズムにおける人間の塔の意味を明らかにし、結

論とする。

なお、本研究におけるカタルーニャ語の表記に関しては、標準語であるバルセロナ方言を参考にした。しかし、バルセロナなど、カタルーニャ語の正確な発音ではない読み方が日本で一般的である場合は、通例を採用した。また、本文中に記載した人名は、すべて仮名とした。

第２章　ナショナリズムとシンボル

１．ナショナリズムへのアプローチ

ナショナリズムとは、ネーションを前提として発生し、そこに高い価値を見出す一連の言説である。ナショナリズムは、ネーションの独自性や有価性を所与のものと見せかけるような「ナショナルなもの」を作り出し、自らと他者の違いを強調する。また、ネーションの主権性を強く主張し、ネーションとその政治的象徴である自治政府の権限の及ぶ範囲が、常に一致していることを求める［原 2011:197］。

原は様々なナショナリズム研究を、原初主義、近代主義、エスノ・シンボリズム、社会構成主義の 4 つに分類した。原初主義とは、ナショナリズムの由来を、ネーションに対する帰属意識や肯定的な感情に求める主張である。この場合、ネーションは「自然」で「太古から存在する」永続的な共同体と定義される。ネーションの構成員は、血縁・伝統・言語などの客観的な「原初的絆」によって、一つにまとめられている。ナショナル・アイデンティティは、この「絆」を元として、各個人に自然に発生する。そのため、ネーションは永続的であるだけでなく、所与的で固定的であり、完全に閉鎖的な共同体であるとされる［原 2011:11-38］。これに対し近代主義においては、ナショナリズムを、近代化の過程で起きた一部のエリート層による民衆の動員、と定義する。ナショナリズムは、エリートが自分の権限を拡大するために、近代化の中で作り出されたネーションという概念を利用し、民衆を扇動して引き起こした、とされる。近代主義者はこうしたエリートの行動の原因を、政治や経済など近代社会の一側面に求めて、ナショナリズムの発生過程を構造的に分析しようとする［原 2011:79-123］。エスノ・シンボリズムは、上記の両者を折衷したアプローチである。このアプローチではナショナリズムを、前近代に存在したエスニック共同体から脈々と受け継がれてきた、エスニックな意識の発露、と捉える。このエスニック共同体は、近代のネーションの原型であり、「古いネーション」においては、近代化以前にナショナルな意識が生まれていた。そして、エリートや支配者集団がこのナショナルな意識に支配されて、民衆を動員してナショナリズムを引き起こす。民衆はその意識に共鳴し、ナショナリズムに自ら加わろうとする。このため、近代的ネーションは、半永久的に持続していく［原 2011:53-67］。3 つのアプローチに対し原は、言説と「ナショナルなもの」との

関わりの観点から見たナショナリズム研究を、社会構成主義と呼んだ。そして、社会構成主義は他の 3 分類のデメリットを乗り越えうるものであり、ナショナリズム研究の基底に置くべき概念であると述べた［原 2011:49-52, 75-78, 189-140］。原によれば、ナショナリズム研究における社会構成主義とは、ナショナリズムを人々の社会的言説によって作られているものと捉える態度である。その際前提となるのは、次に挙げる 3 つの事柄である。即ち、ネーションは実体ではなく、その構成員によって「想像された共同体」［アンダーソン 1973:24］であるということ、ナショナリズムは、ネーションやナショナル・アイデンティティをめぐる言説によって構成されているということ、そしてナショナリズムを研究するには、言説分析によって人々がネーションをどのように実体視しているかを明らかにすることが肝要である、ということの 3 点である［原 2011: 8-10］。

しかし一方で、社会構成主義的アプローチだけでは、言説を重視するあまり、ナショナリズムの由来や形成過程についての研究をないがしろにしてしまう可能性がある。そこで原は、社会構成主義のデメリットを補完するために、上記 4 つのアプローチを組み合わせた、複合的なアプローチを提示した。この手法を採用することで、具体性を持ったナショナリズムの議論が可能になるという［原 2014:315-321］。

筆者は、地域ナショナリズムを研究する上でも、このアプローチは有用であると考える。これまでも、ある国民国家から分離独立しようとするナショナリズムについて、主に近代主義から分析がなされてきた。近代主義者は、近代化の過程で起こる経済格差が分離独立のナショナリズムを生み出す、と主張した［原 2011:103-104］。しかし、現実の社会に照らし合わせてみると、この説明は妥当性を担保できないことがわかる。カタルーニャ地域は、19 世紀に同地域で工業化が始まってから、一貫してスペイン経済を牽引してきた。現在もカタルーニャ州の GDP は、スペイン全体の約 22%を占めている。これを見ると、カタルーニャ地域ナショナリズムは、前述の枠組みでは捉えられないことがわかる。以上のように、ナショナリズムを、近代化を背景にエリートと民衆によって構成された、静的なものであると捉えると、ナショナリズムを理解する際に祖語が生じてくる。こうした祖語の要因は、国民国家のナショナリズムと地域ナショナリズムを全く別のものとしてとらえる発想にある。これを克服するためには、社会構成主義的アプローチが必要になる。このアプローチ内では、人々によって想像された様々な範囲のネーションに対する言説を分析するため、国民国家とそれ以外の

地域のナショナリズムの両者を、無理なく扱うことができる。よって本稿においても、社会構成主義を中心としながら他の方法も適宜取り入れる、複合的アプローチを取るものとする。

２．シンボルの機能と特徴

(1) 「ナショナルなもの」とは

それではネーションの構成員は、何を通じて、本来実体があるものではないネーションに、実体を見出すのだろうか。それは、人為的に選択されたシンボル・神話・記憶などの「ナショナルなもの」である。エリクセンは、一見典型的なエスニックの象徴、即ち「固有性を示す文化的エンブレム」［エリクセン 2006: 204］を用いることが、ナショナリズムの中核を担っていると主張する。ホブズボウムは、「ナショナルなもの」はネーションの「伝統」として、ネーションの構成員に提示される、と指摘した。彼は、「伝統」を「創られた伝統」と呼び、それが人為的に創出されたものであると主張した。創られた伝統の特徴とは、「実際に創り出され、構築され、形式的に制度化された「伝統」であり、（中略）日付が特定できるほど短期間（中略）に生まれ、急速に確立された」［ホブズボウム 1992:10］ということである。またホールは、あるネーションの「ナショナルなもの」として示された文化を、ナショナル・カルチャーと命名した［Hall 1992: 596］。

「ナショナルなもの」は、ネーションの構成員にその歴史と文化的固有性を再考させ、国としての体についての感情を作り出させることを通じ、ネーションを実体化させる。それらは、何かしらの古い慣習を使いながら、ネーションの起源神話に沿った新しい形式で提示される。そのため、「ナショナルなもの」と旧来の伝統とが接合され、ネーションの歴史と辻褄が合うように見せかけられる。「ナショナルなもの」はネーションの過去からの連続性を暗示するものとなり、ネーションの「歴史」を創り出すのである［ホブズボウム 1992:13］。ホールによると、ナショナル・カルチャーが特定の歴史的過去と結び付けられることで、ネーションの構成員はその伝統がはるか昔から存在していたのだと思い込まされ、ネーションの現実性を確信させられる［Hall 1992:600］。言い換えれば、ナショナリズムは「ナショナルなもの」を取り巻く言説によって構成されており、その内容を明らかにすることで、構成員がどのようにネーションを「ナショナルなもの」に仮託しているのか明らかにすることができる。

(2) 「ナショナルなもの」の機能とそれをとりまく言説

「ナショナルなもの」は、ネーションの実体化以外にも、いくつかの機能を有する。まず挙げられるのは、構成員にネーションの正当性を訴え、帰属意識を生み出すという機能である。ホブズボウムは、「伝統」即ち「ナショナルなもの」を、公的儀礼やシンボリズムと結びつけることで、構成員にネーションの具体的な表象を見せ、社会的連帯感や帰属意識を生み出す、という［ホブズボウム 1992:18］。またホールは、ナショナル・カルチャーの役割とは、ネーションに意味と現実性を与え、それに構成員が自己同一化することである、と主張した［Hall 1992:596］。金は、シンボルが、ネーションの構成員にネーションの現実性や可視性だけではなく正当性をも印象付けるとともに、構成員自身をネーションに取り込んでいくことができると指摘した［金 2012:191］。

このことは、ネーション内の「我々性」と「他者性」を作り出し、両者を区別するという機能につながる。裏を返せば、それはネーション内の差異を覆い隠し、ネーションの構成員を「我々」という呼称のもとに一つにまとめることでもある。エリクセンは、エスニックな象徴が、ネーションの構成員と他者を区別する役割をも担っている、と述べる［エリクセン 2006:205］。換言すれば、構成員にとってのエスニックな表象とは、「我々」と「他者」を区別するナショナルな境界線ともなる。同時に、構成員自身が「ナショナルなもの」を通じて、ネーション内部の同一性を強く主張することで、内部のネーションの権力構造を正当化するのである。

それでは、「ナショナルなもの」をとりまく言説とは、具体的にどういった内容なのか。それは、「ナショナルなもの」にどのような意味を付与するのか、ということである［エリクセン 2006:210］。構成員は、ネーションに対して抱くイメージを、「ナショナルなもの」に投影する。そのため、「ナショナルなもの」は、ネーションの実体や歴史にふさわしく、構成員全体の帰属意識を発露させ、我々意識を生み出すものでなくてはならない。一方で、構成員が「ナショナルなもの」に見出す意味は、彼らがネーションにどのような性質を見出すかによって変化する。

以上より、構成員が、ネーションと「ナショナルなもの」を相互に仮託していることがわかる。構成員は、「ナショナルなもの」を媒介にネーションの意味を操作し、ネーションの意味を媒介に「ナショナルなもの」の意味を操作するのである。操作された意味は固定化され、無意識の内に再生産される。その一方で、その意味は変化しうる。

以前見出していたものとは違う性質がネーションに見出されるようになれば、「ナショナルなもの」の意味もおのずから変わるのである。こうした「ナショナルなもの」とネーションの意味の形成・固定化・変化を追っていくことは、ナショナリズムの分析において非常に重要である。

上述したように、「エンブレム」「伝統」「ナショナル・カルチャー」「シンボル」など、「ナショナルなもの」に当てられた呼称は様々である。しかしこれらは、それぞれ指し示すものの範囲が微妙に異なるため、本稿ではその定義を「言語、歴史や神話、宗教、生活習慣、音楽や舞踏や祝祭や伝統芸能、メディア、地図など、ネーションの構成員にネーションを実体視させるために用いられ、かつ構成員のアイデンティティを鼓舞し互いの感情的紐帯を高めるような、あらゆる創られた伝統」とし、まとめてシンボルと表現する。シンボルという言葉を採用した理由は、この言葉により、「ナショナルなもの」特徴を、より正確に表現しうると考えたためである。エンブレムやナショナル・カルチャーといった表現に比べ、シンボルという言葉は、人々の上に祭り上げられ、何かを代弁させられている、という語感が強い。このニュアンスは、本来ナショナルな意味など持たなかった事物や行為が、特定の人々によって担ぎ出され作り替えられていき、ネーションの構成員からネーションという概念を仮託されていくという、「ナショナルなもの」の形成過程に呼応するものである。

第３章　人間の塔とは

１．人間の塔の概要

(1) 人間の塔の発祥

初めて人間の塔の実演が行われたのは 18 世紀とする説が有力であるものの、諸説あり明らかになっていない。その起源についても同様である。しかし、「バレンシア人の踊り」と「モチガンガ」と呼ばれる二種類の異なった舞踊が、人間の塔の形成に大きく貢献したとされる。二つの舞踊においては、最後の部分で、観衆に対する感謝の気持ちを表すために、踊り手たちは 2・3 段の塔を組み立てることを常としていた。この最後の部分が 18 世紀後半に切り離され、同世紀の終わり頃には独自の発展を遂げ、人間の塔の原型となったという［Vallecillo 2006:139］。

人間の塔の発祥地は、カタルーニャ南部の都市バイス(2)であるとされている。その後人間の塔は、バイスやビラフランカ(3)など、カタルーニャ南部を中心に行われてきた。人間の塔が、本格的にカタルーニャ中央部や北部にまで広まり始めたのは、20 世紀半ばのことである。

(2) 人間の塔の規則と種類

人間の塔の組み立て方には、一定の規則がある。土台となる一段目の人々が、円陣を組む。その肩の上に二段目の人々が登り、同じく円陣を組む。その上に三段目の人々が登る、といった順に塔を高く作っていく。そして、組み立ての最後には、アンチャネータ（enxaneta）と呼ばれる子供が、塔の一番上まで登る。全ての人が無事に地面に降りることができたら、塔は成功と見なされ、「降りた城」（castell descarregat）と呼ばれる。逆に、塔が不成功と見なされた時も、アンチャネータの動きが重要となる。アンチャネータが上まで登った後に塔が崩れたら、「持ち上がった城」（castell carregat）と呼ばれる。また、アンチャネータが登っている際に、登るのをやめてしまったり、塔が崩れてしまったりした場合は、「崩れた城」（castell desmuntat）と呼ばれる。さらにアンチャネータが登る前に、メンバーの自己判断で塔を作ることを諦めることもある。この場合、塔は「お試し」（un intent）と呼ばれる。

塔には様々な種類があり、種類は、一層にいる人数と、その層の数を組み合わせて

表現される。一層の人数は 1 人から 9 人、層の数は 6 層から 10 層と、様々なバリエーションがある。例えば、一層にいる人数が 3 人で、8 層ある塔を作る場合、この塔は「8 層の 3 人（3 de 8）」と呼ばれる。例外は 1 層に 1 人の塔の場合で、これは「柱」（pilar）と呼ぶ。6 層の柱の場合は、「6 層の柱（pilar de 6）」である。

図 1 「8 層の 3 人」

(http://www.lavanguardia.cat 参照)

図 2 「6 層の柱」

(http://www.minyons.cat 参照)

塔の形態によっては、この呼び方の後ろに、「補強付き」、「補強と腕輪付き」、「下から」といったオプションがつくことがある。例えば補強とは、下から二層目に組んだスクラムを指す。腕輪は、補強のさらに上に組まれる、小型のスクラムを指している。これらは、8 層から 10 層の、高さがあり難しい塔を完成させるとき、塔の重さを受け止め支えるために用いられる。「9 層の 3 人、補強つき（3 de 9 amb folre）」と表記される。コーリャとして認められるための最低条件は、「6 層の柱」を成功させることだと言われる。また、9 層や 10 層の塔を作るのは非常に難しいという。2015 年 10 月の時点で 9 層の塔を完成させられるのは、90 団体中 12 団体、10 層の塔を完成させられるのは、同数中 2 団体のみであった。

(3) 塔の各部の名称

どの種類の塔も、大きく 3 部分で構成される。基層の部分は、松かさ（pinya / ピーニャ）と呼ばれる。この部分は、塔に登る人々の重さを受け止めるために、たくさんの人数を必要とする。そのため初心者や飛び入り参加者は、この部分に配置される。それに対し、上から一層目・二層目・三層目は、合わせてポン・ダ・ダル（pom de dalt）と呼ばれる。この部分は、子供たち（canalla / カナーリャ）が務める。ポン・ダ・ダル以外の塔の部分は、幹（tronc / トロンク）と言わる。

また、各層には、それぞれ名前が付けられている。次頁に示す図は、「8 層の 3 人」の塔に従い、各層の名称を記したものである。

（上から順に）

八層目：<u>アンチャネータ</u>

七層目：<u>アチャカドー</u>「持ち上げる人」

六層目：<u>ドースス</u>「二人組」

五層目：<u>キンツ</u>「五番手」

四層目：<u>クアルツ</u>「四番手」

三層目：<u>タルスス</u>「三番手」

※「腕輪付き」の場合は、タルススの部分でスクラムを組む

二層目：<u>サゴンズ</u>「二番手」

※「補強付き」の場合は、サゴンズの部分でスクラムを組む

一層目：<u>ピーニャ</u>「松かさ」

・<u>トロンク</u>「幹」：

ピーニャの中で、サゴンズが乗っている人＋サゴンズから、ドーススのすぐ下の層（図の場合はキンツ）まで

・<u>ポン・ダ・ダル</u>：ドースス・アチャカドー・アンチャネータ

図３　各層の名称（『8 層の 3 人』の場合）

(http://www.aolivella.cat/Castallers/ELS%20CASTELLERS.pdf より引用)

なお、層の増減は、トロンクの部分で調節される。

例えば、9 層の塔の場合は、五番手と二人組の間に「六番手」（sisents / シゼンツ）が入る。反対に 7 層の塔の場合には、五番手がなくなり、四番手の上に二人組が来る。

(3) 服装

実演の際の服装は、各コーリャの色の上着、ファイサ（faixa）と呼ばれる黒い帯、白いズボン、モカドー（mocador）と呼ばれる、赤地に白い水玉模様の布である。上着には必ず襟がついている。実演の際、メンバーは自らにかかる力に耐えるため、歯を食いしばる。しかしそれが過ぎると、歯が傷ついてしまうため、襟を噛んで歯を痛めるのを避けるのである。ファイサは、一枚の長く黒い帯である。コーリャのメンバーは全員、ファイサを腰に巻き付けて実演に臨む。ファイサは特に、塔に登るメンバーにとって重要である。塔に登る際、自分の下にいるメンバーのファイサに足を引っかけて登るからである。ファイサを巻き付けるときは、自分でファイサの一端を持ち、余った部分が背中側に回るように､その内側に立つ｡もう一端は他の人に持ってもらい、強く引っ張ってもらう。次に、自分の腰に端を巻きつけて背中側に折り込み、体をゆっくりと反時計回りに回しながら、できるだけきつく巻きつける。モカドーとは、コーリャの紋章が入った、ハンカチくらいの大きさの布である。ファイサの上から巻いたり、手首に巻いたりと、人によって使い方は様々である。

(4) 音楽

人間の塔の音楽は、グラージャ（gralla）と呼ばれる木管楽器と、タバル（tabal）と呼ばれる太鼓で構成される。グラージャは主旋律と副旋律を担当し、タバルはリズムを刻む。二つの楽器の起源は明らかになっていないが、18 世紀には既に使われていたのではないか、という説も唱えられている［Giori 2012:35］。

音楽は、人間の塔の実演において、非常に重要な役割を果たしている。例えば「人間の塔の曲」（Toc de Castell）は、人間の塔の実演に際して演奏される。この曲が演奏されるタイミングは、人々が塔を登っていく時、アンチャネータが頂上にたどり着いた時、人々が下っていく時、トロンクのメンバーが全員降りて塔が成功した時の 4 部分である。雰囲気を盛り上げるだけではなく、メンバー全員に、塔が今どのような段階にあるのかを示すための曲でもある。アンチャネータとドースス以外のメンバーは、実演の際、塔が今どのような状況にあるのか確認することは不可能であるが、この曲を聴くことで状況を知ることができる。

各コーリャが、自身の楽隊を持っており、音楽に関しては彼らに一任されている。彼らは週に一回、練習場に集まって練習する。

２.「バルセロナ人間の塔の会」（Castellers de Barcelona）について

次に、筆者がフィールドワークを行った「バルセロナ人間の塔の会」（以下 CB）の概要を述べる。

CB は、1969 年にバルセロナで発足したコーリャである。バルセロナを中心に活動する 6 つのコーリャの中で最も長い活動年数を誇る。また、カタルーニャ州全体で見ても、現在も活動を続けているコーリャの中で、CB は 4 番目に古い。このコーリャはまた、その実力でも知られており、難易度の高い「9 層の 4 人、補強つき」「9 層の 3 人、補強つき」を完成させられる、数少ないコーリャである。地域新聞の Ara 紙のランキングによれば、現存する 90 コーリャの内、CB は現在 7 位となっている(4)(5)。これは、人間の塔の発祥地であるカタルーニャ南部以外の地域で、2 番目に高い順位である。

現在、CB の名簿に登録されているメンバー数は、2,000 人ほどである。その内、練習に継続的に参加している人の数は 100 人から 150 人ほどで､大きな祭日となると 200 人から 300 人程度が参加する。その内、子供は 30 人前後である。

メンバーは、週 2～3 回の練習と、週末の行事に参加する。全体練習は、主に火曜日の 19 時半からと金曜日の 21 時半からで、約 2 時間続く。「柱」に参加する人や子供たちは、全体練習の前の時間に加え、水曜日にも練習を行っている。また、音楽のチームは、水曜日に 1～2 時間程度練習の時間を設けている。

ほとんどの場合、コーリャの練習は、専用の練習場で行われる。練習場は、半地下になった中庭と、隣接する体育館で構成される。また、中庭の壁には「図」（figura / フィグラ）が書かれたホワイトボードがある。この図には､「補強つき」の塔の、ピーニャとフォルラの人員配置図が記されており、練習の際に誰がどの位置に行かなければいけないのか、書き込めるようになっている。体育館の奥の階段を上ると、バルに出る。練習前やその後には、メンバーや知り合いと話しながら、食事をしたりお酒を飲んだりする人で溢れかえる。

練習場は住宅街の一角にあり、出入りが自由であるため、メンバーの家族や地域の人など、様々な人々が練習を見に訪れる。重要な実演の前の練習ともなると、このスペースに入りきらないほどの人が詰めかける。

(1) 組織

他のコーリャと同じように、組織は、本部（La Junta）と技術部（La Técnica）で構成されている。前者は主に、コーリャ全体を統括し、運営する担当である。メンバーは、議長（President / 広報の際、コーリャの代表として出席）・秘書（Secretaria）・会計（Tesor）・各部門長（Sectors Vocals / 音楽部門やレクリエーション部門など、実際に人間の塔を組み立てること以外の様々な活動の部門長）で構成される。後者は、人間の塔を組み立てる際の技術を担当する。主要な議題は、それぞれの塔の人員配置、練習メニュー、祝祭の時に披露する塔の種類の決定である。メンバーは、幹のキャプテン（Cap de Tronc）・松かさのキャプテン（Cap de Pinya）・柱のキャプテン（Cap de Pilar）・子供のキャプテン(Cap de Canalla)・グラージャ奏者のキャプテン（Cap de Grallers）である。各部門には、キャプテンを補佐し練習をスムーズにするためのチームがある。なお、コーリャ全体を指揮するコーリャのキャプテン（Cap de Colla）は、両方に属し、両方の会議に参加する。彼はまた、練習や実演の際、塔の全体に指示を出し、コーリャを統率する役目を負っている。

(2) 紋章と上着の色

人間の塔では、各コーリャで上着の色と紋章を独自に定めている。CB はこの色と紋章に、バルセロナを代表するコーリャであるという気持ちを込めている。このコーリャの上着の色は、カタルーニャの守護聖人である聖ジョルディの赤い十字架にちなみ、明るい赤である。また紋章には、バルセロナ市の紋章と同様の意匠を使用している。十字架と四本の線は、市の紋章同様赤であるが、地は市のものとは違い、白である。これは、上着の赤色と、ズボンの白色を組み合わせたものである。

Castellers de Barcelona

図４　「バルセロナ人間の塔の会」の紋章

(http://www.castellersdebarcelona.cat/参照)

第４章　地域ナショナリズムと人間の塔

１．歴史的関わり―伝統舞踊サルダーナとの比較を通じて

(1) 19 世紀から 1939 年まで

1) 人間の塔―「田舎の危険なスポーツ」という認識―

発祥から 150 年ほど、人間の塔の実演形式や運営手法は、現在のものとは全く異なっていた。当初のコーリャのメンバーは、特定の家族やグループによって構成されていた。彼らは人間の塔を実演し、それによって得られる収入で生計を立てる、職能集団であった。実演は、地域の伝統的な祝祭や、身分の高い人々の地域訪問に際して行われた［Vallecillo 2006:139］。このためメンバーにとって、実演における収入と、より多くの稼ぎを得るためのコーリャ間の競争やそれに起因するライバル心が、人間の塔を行う上で重要なモチベーションとなった。こうした伝統的な形式の人間の塔は、1960 年代まで続いた。そしてこの時期になるまで、カタルーニャ主義と人間の塔が接近することはほとんどなかった。それまで人間の塔は、カタルーニャ全体のシンボルではなく、カタルーニャの田舎の「芸能」だったのである。

唯一両者が接合されかけたのは、19 世紀後半であった。19 世紀はカタルーニャ主義が大いに発展した時期であるが、これを牽引したのが「ラナシャンサ」（reneixença/ルネサンス）と呼ばれる一連の文芸復興運動であった。この運動は、知識人が中心となって 1833 年に始まり、広義にはカタルーニャの「忘れられてしまった」民族アイデンティティの「復元」と再形成を、狭義にはカタルーニャ語の文芸語としての復権を目指していた。1840 年代には、カタルーニャ語による文芸作品が多く発表され始め、1859 年には「花の宴」(6)が始まった。またカタルーニャ主義者は、カタルーニャのシンボルを創出することに、熱心に取り組んだ。その結果、カタルーニャ語とその使用、黄色い地に赤い線が 4 本入ったサニェーラと呼ばれる旗、守護聖人（サン・ジョルディとムンセラットの聖母）、カタルーニャの州歌「草刈人たち」、民族舞踊サルダーナ、市民の祭り、勤勉さや冷静な判断力などのカタルーニャ人らしさとされる性格など、現代においてもカタルーニャのシンボルとされているものが生み出された［Prat 1991:234］。これらは、当時の知識人や上流階級が考えるカタルーニャのイメージを仮託できるものであった。そのイメージとは、中世からの長い歴史と伝統を持ち、工業

化と都市化を両輪とする近代化が進み、芸術が盛んであり、全体の調和を重んじる共同体としてのカタルーニャである［Giori 2012:100］。当時のカタルーニャ地域では、繊維産業を中心とした工業化と、それに伴う都市化が進んでいた。そのため、カタルーニャ地域のシンボルは､伝統と近代化という､相反する側面を備える必要があった。言語・旗・州歌・祭りなどは、ネーションの歴史を体現するものであった。例えば、祭りの中に含まれるディアーダは、9 月 11 日に行われるもので、カタルーニャ・ネーションにとって重要な祝祭である。カタルーニャ主義者によって､1714 年のこの日は、カタルーニャが独立を「喪失」した日であり、以来 300 年あまり続くスペインによる支配の始まりでもあると解釈された。ディアーダは、カタルーニャ主義者にとって、過去と現在をつなぎ、ネーションの歴史を作り上げ実体化させる手段であったのである。また、カタルーニャ人の性格やサルダーナは、後述するように、近代化を体現すると考えられた。こうしたシンボルは、当初ナショナルな意味を持っていなかったものの、カタルーニャ主義達によってネーションを表すものとして選択された。エリクセンの指摘する通り、こうしたシンボルは、都市文化に属する知識人が、カタルーニャ人は独自の文化を持つ単一民族であり､「それゆえに国家を形成するべきであるという『証拠』として都市の政治的文脈に取り入」［エリクセン 2006:195］れていったと考えることができる。

カタルーニャ研究家のプラットは、シンボルが数年という速いスピードで、社会に浸透したことを明らかにする。例えばサニェーラの由来は、1859 年に発表された「血の 4 本」という詩であった。この詩は、バルセロナ辺境伯爵家(7)の伝説的な祖であるギムレが、死の間際、君主であったフランク国王から 4 本の血の筋が入った盾を与えられたという伝説から題材をとっていた。詩の作者は、カタルーニャ主義をもってこれを書いたわけではなかった。しかしカタルーニャ主義者たちはこの詩を「発見」し、カタルーニャ・ネーションの起源を説明するものと解釈した。そして 4 本の血をあしらった旗を作製し、カタルーニャ地域を象徴する旗として使用するようになった。その後この旗に関する詩が発表されたり、雑誌の表紙として旗のデザインが使われたりすることで、サニェーラの社会的な認知度はますます高まった。芸術家たちは、サニェーラを積極的に作品に取り入れるようになった。何年かの使用と複製を経て､「黄色い地に赤い四本の旗」は、カタルーニャの「国旗」として認められるようになったのである［Prat 1991:233-234］。

そして、シンボル創出の一環として、1880 年頃から、様々なカタルーニャ主義者が人間の塔に注目し始めた。彼らはカタルーニャ地域の独自性と人間の塔の特徴の類似性を「発見」し、人間の塔をカタルーニャの伝統として賛美した。その一方で、この芸能はカタルーニャ地域全体のシンボルとしてふさわしくないと考えるカタルーニャ主義者も、少なからず存在した。そして、その後人間の塔は、カタルーニャ地域のシンボルとして扱われなくなっていったのである。その理由は明らかにされていないが、文化人類学者のジオリは、人間の塔は一部のカタルーニャ主義者にとって、前述したネーションのイメージにそぐわなかったのではないか、と指摘する。人間の塔は、彼らの目に、都会風ではなく、激しい競争がありライバル心をむき出しにする、洗練されていない危険なスポーツと映った［Giori 2012:101; 2014:162-163］。これは、ネーションのイメージとは正反対の評価である。筆者は加えて、人間の塔のイメージについてカタルーニャ主義者間で意見の対立が見られたことから、カタルーニャ主義全体を表象するものとはなりえなかったのではないか、と考える。

さらに 19 世紀後半から、人間の塔は衰退期を迎えた。実演自体は行われていたものの、そのレベルは非常に低く、19 世紀初頭に成功していた塔も成功しなくなった。原因について、都市部へのアクセスが改善されたことに伴う人口流出、経済危機によるメンバーへの支払いの滞りと実演の数の低下、サルダーナの浸透、参加する若者の人数の著しい減少などが指摘されている［Giori 2012:105; Vallecillo 2006:139］。若者の参加数の減少についてジオリは、米西戦争で大量の若者が徴兵され命を落としたこと、バルセロナへのアクセスがよくなり、若者が都市に惹きつけられ出身地を顧みなくなったこと、などが原因であると述べる［Giori 2012:106］。この間人間の塔は、都市部のカタルーニャ主義者によって、田舎の貧しい乱暴な人々が行うもので、古臭く野蛮であると見なされるようになった［Vallecillo 2006:139］。人間の塔に対するこのような評価は、人間の塔とカタルーニャ主義を、接合不可能にさせていった。

1926 年頃から、人間の塔は徐々に衰退期を脱し始めた。新しいコーリャも作られ、コーリャ間のライバル心から、塔のレベルもさらに上がっていった［Vellecillo 2006:140］。しかし、カタルーニャ主義者は依然として、人間の塔をカタルーニャ地域のシンボルとは考えていなかった。

2) サルダーナとカタルーニャ主義の変容

人間の塔に対し、カタルーニャのシンボルとしてカタルーニャ主義と積極的に接合されたのが、サルダーナという舞踊であった。サルダーナは、カタルーニャ北部の一地域の舞踊であり、19 世紀初頭には全く知られていなかった。しかし、伝統的に受け継がれてきた踊りや音楽に手を加えた「長いサルダーナ」（以下サルダーナと表記）は、1890 年代に階層を超えて全カタルーニャ社会に広まっていった。この舞踊の特徴は、輪になった人々が手をつなぎ、楽器の物悲しい演奏に合わせて、声を出さずに独特なステップを踏むことである。

サルダーナが大衆に広まったことには、当時のカタルーニャ地域における社会的な変化が影響している。サルダーナ浸透の担い手となったのは、中産階級であった。当時カタルーニャ地域では、繊維工業を中心に工業化が進んでいた。その結果、新しい社会階級として中産階級が台頭した。彼らはサルダーナの形式に、中産階級が重視する規範を見出した。それは、勤勉さや堅実さ、集団間の協力と調和などである。そして彼らは、これらの価値観をカタルーニャ人全体の美徳と捉え、サルダーナをカタルーニャ地域の独自性の真骨頂として神話化した。さらにカタルーニャ主義者は、サルダーナの中でカタルーニャ主義にとって不都合な点を意図的に無視し、新しい意味を付与した。改良されたサルダーナは、自由主義者が使用していた曲を多く組み入れていたため、その浸透ぶりは当初保守派の反発を買っていた。しかし、カタルーニャ主義者たちは、カタルーニャ内の政治的対立を無視し、サルダーナがあたかも全てのカタルーニャ地域の住民が共有する「伝統」であるかのように、描出したのである。こうして、サルダーナを踊ることは、カタルーニャ人を作りカタルーニャを作ることになった［Giori 2012:91-93, 95-96］。

社会変化は経済にとどまらず、政治、さらにはカタルーニャ主義の担い手とそのネーション観にも影響を与えた。20 世紀にはカタルーニャ主義の多様化が進んだ。このことは、それまでカタルーニャ主義の中心であった上流階級や知識人に加え、中産階級や農民や都市労働者など、様々な社会階層の人々がカタルーニャ主義に共感する基盤となった。自由主義者は、スペイン国内でカタルーニャ地域の権利を求めていく連邦派と、スペインからの独立を求める独立派に分かれた。また、スペイン王政とカトリックを支持する保守派も、独自のカタルーニャ主義を打ち出したが、これは農民など保守派の支持層が、カタルーニャ主義に接近する精神的な土台であった［立石

2002:109-112］。また、多様化した主張をまとめるようとする動きもあった。カタルーニャ主義会議が開催されたり、カタルーニャ地域の精神的・物質的利益の擁護を目的とする、カタルーニャ・センターが設立されたりした。特に後者は、多様な職業のカタルーニャ主義者が集合し議論する場となった。このようにカタルーニャ主義は、一般大衆が新たな担い手として加わったことで、社会階級を超える主張として構築されていったのである［Giori 2012:90, 107］。

また、中産階級や一般大衆などの新しいカタルーニャ主義者を包摂するために、それまで知識人や上流階級に受け入れられてきたものとは違った、新しいカタルーニャ・ネーションの定義が必要となった。その核となったのは、スペインとカタルーニャの差異を強調することと、言語を基盤とした包括的なカタルーニャ主義を構築することである。スペインとカタルーニャの差異化を図るために、カタルーニャ人の共通の敵としてスペインを表象し､スペイン人に対する戦いを想像させることが重要となった。カタルーニャ主義者は、バルセロナ辺境伯の「民主主義」(8)や、スペイン人に対抗するカタルーニャ人のエピソードなど、中世から近世にかけてのカタルーニャを神話化し賛美した。また、中世の歴史・文学・芸術を積極的に再評価しようとした。こうして、歴史的過去との連続性を強調することで、カタルーニャの正当性を演出したのである。同時に彼らは、工業化に代表される近代的な側面も、カタルーニャがスペインよりヨーロッパ的であり優れている証拠であるとして、農業主体の貧しいスペインと対置する形で積極的に評価した［Giori 2012:89-91］。こうした見方は現代でも残っている。コーリャのメンバーの一人であるパウは、「スペインは農業が中心なのに対して、カタルーニャは工業が中心だ」と筆者に語り、二つの地域の違いを強調した。

差異化の文脈の中で、カタルーニャ語は、カタルーニャ地域とスペインの差異を端的に表すものとして、カタルーニャ主義の言説の根拠となった。当時、成長著しいカタルーニャ経済を見込んで、スペインの他地域からの国内移民が急増していた。彼らの日常語はカスティーリャ語であった。言語の違う「他者」を前にして、カタルーニャ地域の一般大衆にカタルーニャ語を媒介とした「我々性」の意識が生まれることとなった［立石 2002:122-123］。カタルーニャ語はそれまで、上流階級や知識人にとってのみ、カタルーニャ地域のシンボルであった。それが今や、社会全体にとってカタルーニャ地域のシンボルとなり､「我々」と「他者」を区別する境界線となったのである。

(2) 1939 年から 1951 年まで

1) 人間の塔―フランコ体制の象徴として―

20 世紀初頭、スペインは共和主義勢力が政権を担っていた。しかし、これに反発する軍部や保守派の声を受け、1936 年にフランコ将軍がクーデターを起こしたことで、約 3 年に及ぶスペイン内戦が始まった。内戦はフランコ側の勝利に終わった。フランコは、終身国家元首に就任して独裁体制を開始し、スペインを国家主義に基づいた単一民族国家としてまとめあげることを目指した［立石 2002:133-135］。その中心にある思想はフランコの神格化と礼賛であり、フランコ、極右政党のファランヘ党、軍隊、カトリック教会を軸として、全スペイン人を一体化させることであった。そして、「一つの偉大なるスペイン」というスローガンのもと、体制による文化の画一化、即ちスペイン中心化が進められた［Giori 2012:139-142］。国家の一体性を覆すようなカタルーニャ主義派の行動は、厳しく罰せられるか抹殺されるかした。具体的には、知識人の弾圧や殺害、公私にわたるカタルーニャ語の使用・サニェーラ・「草刈人たち」の歌といった独自性のシンボルの禁止などが行われた。抑圧に対し、政治勢力は国内外で抵抗を続けた［立石 2002:134］。しかし、国内での地域主義的運動は非合法化され、表明した場合には厳罰が処されたため、カタルーニャ主義は基本的に私的な環境で維持された。それは非合法な市民活動や、文化・宗教団体においてである［Clua i Fainé 2014:88］。政治的な力が徹底的に奪い取られた中、カタルーニャ主義は一見政治と無関係であるような、宗教や文化的要素によって表される他なかった。よってこうした活動は、必然的に、フランコ体制への抵抗という意味を伴うことになった。

しかし、人間の塔には、カタルーニャ主義と体制への抵抗という意味は、付与されなかった。むしろ人間の塔は、フランコ体制側との良好な関係を保ち、その恩恵を受けていた。体制側は、政府機関や国家の祝祭のために実演を行うことを要求し、コーリャのメンバーもまたそれを利用して収入を得た。人間の塔が参加した体制側の祝祭の内、少なくとも 6 回には、フランコ自身が同席していた。彼が初めて人間の塔の実演に同席したのは、1948 年、マドリードで守護聖人のサン・イシドロ祭が行われた時であった。その例を見てみると、人間の塔が大成功を収めたことが伺える。実演の終盤で、「5 層の柱」をバルコニー近くで作った時は、アンチャネータが小さなスペイン国旗を掲げた上、それを「柱」からフランコに直接手渡した。フランコはそれを受け取り、アンチャネータとその下のドーススを、自らの手でバルコニーに引き上げたという［Giori 2012: 149-151］。このように、バルコニー近くで「柱」を組み立て、アンチ

ャネータを引き上げることは、今日でも実演において広く行われている。「柱」という最も不安定な種類の塔から子供を引き上げることは、観客に安心感を与える。筆者は、この行動により、「内戦で傷を負った国民に安心感を与える」というフランコの像を暗示しようとしていたのではないか、と考える。また体制の経済的介入により、実演ごとに固定の給料が支払われ、保険システムが導入され、決められたユニフォームが制定されるようになった。また統括本部を初めて設置するなど、組織化も始まった。人間の塔のプロフェッショナル化が始まったのである。しかし、コーリャのメンバー構成や塔の組み立て手法などは以前と変わらなかった。メンバーは固定的で入れ替わりがほとんどなく、実演で生計を立てていた［Giori 2012:148］。

それでは、なぜ人間の塔はカタルーニャ主義のシンボルに成りえなかったのだろうか。これには人間の塔が、もともとカタルーニャ主義のシンボルとして重視されていなかったことに加え、フランコ体制に反対する人々からは、メンバーが体制支持派であると考えられていたことがある［Bertran 2011:44］。この保守的な姿勢の背景には、メンバー自身の意見の多様性があると筆者は考える。その当時コーリャの内部では、政治と人間の塔の関係性について、多様な意見が存在していた。具体的には、人間の塔はただの伝統芸能であり政治とは関係ないという意見、大衆的で参加型の文化活動なのだから、土地の祝祭でのみ実演するべきだという意見、チームスポーツなのだから競争と上達が要になるという意見、お金を支払ってくれるのであれば相手方の政治的立場など関係ないという意見などである［Giori 2012:149］。特に最後の主張は、人間の塔がフランコ体制と良好な関係を保っていたことに対応する。メンバーがそれによって生計を立てていた以上、人間の塔においては、収益が実演のモチベーションにとって非常に重要であった。このことは、前述したような収入がありさえすれば実演する相手の政治思想は関係ない、という態度に繋がりやすかったのであろう。当時の人々の生活は、配給制度と自給自足が基本であった。闇市が日常生活に浸透していき、人々は貧困にあえいでいた［Giori 2012:142］。コーリャのメンバーにとって、その中で糊口をしのぐために、実演によって得られる賃金は非常に重要な収入源だったのであろう。経済的な逼迫が、稼げるのであれば支払いをする相手が誰でもよいという、政治的無関心につながったとしても、おかしくはない。

3) サルダーナ―フランコに対する抵抗の象徴として―

これに対し、フランコ政権への抵抗の中心となったのは、カタルーニャ語とサルダーナであった。カタルーニャ語の使用は、家族や友人などに限られており［Soler 2009:124］、カタルーニャ語を密かに使用することで、「カタルーニャ固有のものとされた言語＝文化の同一性―十九世紀からの「創られた伝統」―を確認し合い、そのことで連帯の絆を深めていった」［立石 2002:136］のである。一方サルダーナは、スペイン国家の一体性を支えるものとして、公的な場所で踊ることを許されていた。これは、フランコ体制の政治文化政策による。フランコ体制は、地域主義を体制の存続に利用するため、1942 年頃から「多様な地方によって構成された一つのスペイン」という国家像を作り流布していた。一体化されたスペインは、様々な地方からなっており、それらの文化や慣習は国家のもとで保護される、という思想である。地方の多様性は、単一国家の賛美へとつなげられた。その中で、カタルーニャも他の地方と同じく、スペインを構成する一地方であると表象されるようになった。カタルーニャは体制によって、近代的かつ大衆的なカトリックの地方であり、スペインの一体性を象徴するもの、と再解釈された。このようなカタルーニャを象徴する存在として、サルダーナは、地方の重視とそれによる国家の賛美という文脈に位置づけられた。カタルーニャ文化やカタルーニャ主義のシンボルといった意味をはぎとられ、代わりにスペインのある地方の代表的な伝統文化、という新たな意味が付与されたのである。［Giori 2012:144］。このように、サルダーナはフランコ体制側にとっては地方の舞踊の一つに過ぎなかったが、カタルーニャ主義者にとっては、「換喩によって作られた彼らの世界の中で、一番大切なものであり、それを踊ることはカタルーニャを取り戻すこと」［Giori 2012:146］であった。以前とは違いサルダーナには、フランコ体制への抵抗とカタルーニャの回復という意味が付与されるようになったのである。筆者は、サルダーナがフランコ体制への抵抗の象徴となったのは、フランコ体制への抵抗の中心が、サルダーナの担い手であった中産階級を中心とする都市の住民だったからではないか、と考える。低所得層で政治的に無関心であった人間の塔のメンバーに比べ、彼らは富裕であり、政治を意識するだけの生活の余裕があった。さらに、サルダーナの持つもの悲しさや静けさは、フランコ体制の抑圧に耐えつつ無言の抵抗を行っていたカタルーニャ主義者たちの心情と、相通ずるものがあったのではないだろうか。ただし 19 世紀初頭と同じく、この場合のカタルーニャには、本稿で定義したネーションの意味は含まれていなかった。カタルーニャを取り戻すとは地域の自主性を回復するという意味合いであること

に、留意する必要がある。

(3) 1951 年から 1961 年

1) 人間の塔―カタルーニャ主義とフランコ体制の「実験台」―

この時期、若年層が多く参入するようになったことをきっかけに、人間の塔で二つの革新が起こった。まず、特定のメンバーが中心となって実演を行い、メンバーの入れ替わりが少ない従来の組織構成から、現在見られるような、メンバーが流動的で交代の早い組織構成に転換したことがある。このことは、メンバーの低年齢化と、それによる塔の組み立ての技術革新につながった［Giori 2012:156, 2014:163］。「8 層の 2 人」や「7 層の柱」などは、20 世紀に入ってから初めて完成した［Bertran 2011:42］。さらに、人間の塔が行われる地域が拡大した。人間の塔は、それまでカタルーニャ南部を中心とした特定の地域でしか行われてこなかったが、この時期からそれ以外の地域でも行われるようになった。こうして新しい人間の塔のメンバーは、古い手法に疑問をつきつけてそこから抜け出そうとした。彼らは、新しい手法や考えや感じ方を人間の塔の世界に持ち込んで、新しい価値づけを行った［Giori 2012:156-157, 2014:163-164］。こうした新しい流れに対し、古くからコーリャに参加するメンバーは、様々な反応を見せた。新しいメンバーの参加を肯定的に評価するメンバーがいる一方、若者を信用せず「人間の塔が人間の塔らしくなくなった」と不快感をあらわにするメンバーもいた。年代的な多様性と伝統が相克し、「古いメンバーにとっては、これらはもう自分が知っていた人間の塔ではなかったし、新しいメンバーにとっては、古いメンバーは合理性がなかった」［Giori 2012:158］という意見の食い違いが生まれた。

この時期、人間の塔はカタルーニャ主義とフランコ体制の双方によって、シンボルとして利用されていた。それらの意味付けは、実演のタイミングと場所に依拠していたのである。しかしあるコーリャが、1960 年に行った実演の最中、サニェーラを掲げた「柱」を作ったことで、人間の塔とカタルーニャ主義との関係が、明確に表されるようになっていく［Giori 2012:161-160］。筆者は、こうしたコーリャの存在は、この時期のスペイン・ナショナリズムの衰退と、地域主義の高揚を表していると考える。この時期、フランコ体制の基盤になっていったスペイン・ナショナリズムは、アフリカの植民地の喪失や軍部と体制の関係悪化などによって、徐々に求心力を失い始めた。野党が勢力を回復し始めるなど、国民の政治意識もゆるやかに変わっていった。また、

体制下で生まれながらスペインの現状に疑問を持ち、自由と民主主義を求める新しい政治的主体が現れた。カタルーニャでは、カタルーニャ主義を標榜する政党が急成長した［Giori 2012:163-164］。このような状況下で、フランコ体制は、なんとかカタルーニャ住民の支持を、自らの側に引き留めようと画策していたのではないだろうか。そのために、カタルーニャの「伝統芸能」とされていた人間の塔を体制に結びつけ、カタルーニャを守護しているのが体制側であることを、アピールしようとしていた。フランコ体制は、人間の塔に彼らがイメージするカタルーニャ地域を仮託していた、とも推察できる。こうしてみると、フランコ体制の政策もまた、人間の塔をカタルーニャのシンボルとした要因の一つであったと考えられるのである。

2) サルダーナ―カタルーニャのシンボル―

この間、サルダーナはさらなる流行を見せた。特に 1952 年に、ムンセラットの聖母に踊りをささげるため年に一度大会が開かれることが決定してからは、その人気に拍車がかかった。新しい団体も次々と生まれ、サルダーナは全国に浸透していった。サルダーナは、フランコ体制に抵抗するカタルーニャのシンボルとして、カタルーニャ主義とのますます強固な繋がりを確立したのである［Giori 2012:160］。

(4) 1961 年から 1974 年

1960 年代に入ると、人間の塔の意味付けが大きく変化する。まず挙げられるのは、人間の塔に､｢多様な人々の社会統合｣という意味が付与されるようになったことである。経済が順調に成長していたカタルーニャに、1950 年代から国内移民が集い始めた。フランコは、経済面では開発主義を掲げ、建設業を中心として大規模な経済成長を実現した。その一方で、経済成長は地域間の格差を生み、農村部から都市部への国内移民を引き起こした。新たな「他者」の流入を前に、彼らの社会統合が喫緊の課題となっていた［Giori 2012: 153-156］。

統合の軸となったのが、カタルーニャ語と人間の塔であった。カタルーニャへの国内移民も、自らの子供がカタルーニャ語を学ぶことを望んだ。彼らは、カタルーニャ語を習得することで、よりよい社会的地位を得、より有利な形で社会に統合することができると考えていたからである［Soler 2009:124］。また、メンバーが流動的になった人間の塔は、移民をカタルーニャ社会になじませるために格好の場所を提供した。カ

タルーニャ地域にやってきて間もない移民の人々にとって、人間の塔は、知り合いを作えたり、実演のために無料で様々な場所へ出かけられたりする、格好の社会参加の場として機能した［Vallecillo 2006:140］。また、多様な人々の参加は、人間の塔に対し、「民主主義と新しいカタルーニャ」という新しい意味を付与させることにつながった。人間の塔は、田舎の危険なスポーツではなく、近代化や民主化に基づいた新しいカタルーニャを、移民も含めた全員で作り上げることの象徴として、認識されるようになったのである。人間の塔の人気は高まり、新しいコーリャが増え、実演の地理的範囲も広がるようになった。このことは実演の機会や収入を得る方法の多様化を生んだ一方、コーリャのさらなる組織化を促した［Giori 2012:167, 171-176］。

こうした流れから、人間の塔に「カタルーニャ主義のシンボル」という新たな意味が付与されるようになった。この意味は、主に政治的な側面から付与され始めた。カタルーニャ主義を支持する政治家たちが人間の塔に接近し始め、市役所を中心に、人間の塔への経済的な支援が行われ始めた［Giori 2012:177］。大衆だけではなく政治家も、人間の塔をカタルーニャの重要な「伝統」と見なし始めたことが伺える。ここにおいて、人間の塔と政治家の間に、初めて大きな接点ができたのである。また 1960 年代の後半からは、政治面に加えて経済・社会面においても、人間の塔がカタルーニャの「伝統」として認知されるようになった。これを推進したのは、主に観光業であった。その特徴は、一国内の地域的多様性を前面に押し出したことである。観光業は、フランコ体制の経済政策の中で重要な位置を占めており、体制側も地域の独自性を象徴する伝統を積極的に奨励した。その中で、各地域ではそれぞれの伝統を再評価しようという運動が盛んになった。訪れる観光客に対し、自分の土地独自のものを売ったり見せたりするということは、自らの地方の伝統を見直し、他の地方との差を発見することに繋がったからである。こうして、観光客に自らの地方を積極的にアピールするため、他の地方との差別化を図り、カタルーニャ人であることに対する新しい誇りを生み出すような「伝統」が模索された。これに当てはまったのが、人間の塔とその新しい社会的イメージであった［Giori 2012:173-174］。カタルーニャ主義というカタルーニャ内部の見方と、観光という外部からの視点に触発された内部での再認識が、人間の塔を媒介としてカタルーニャのイメージを作り上げたのである。

一方でフランコ体制によって、スペイン地方の多様性と国家の一体性の象徴として利用されることもあった。しかし、その回数は減少し、フランコ体制との関係は徐々に

希薄なものとなった。その一方で、いくつかのコーリャは、実演の最中にサニェーラを掲げ、カタルーニャ主義との接近をアピールした。こうした政治的立場の表明の背景には、当時の政治闘争が関わっていた。フランコ体制とカタルーニャ主義の間で緊張が高まる中、全ての人が自らの政治的な立ち位置を見せる必要があったのである［Giori 2012:184］。当時のカタルーニャでは、保守的カタルーニャ主義が台頭していた。彼らは、体制側と交渉しつつカタルーニャの権益を確保することを目標とした。一方、彼らはカタルーニャの文化を積極的に再評価し、カタルーニャ語を軸としたカタルーニャ主義を推し進めた。カタルーニャの文化と言語の保護を目的とした市民団体オムニウム・クルトゥラウの創設から、独裁反対と民主主義をカタルーニャ語で訴える「新しい歌」の流行、カタルーニャ語での雑誌の発行や書籍の出版の再開など、幅広い活動が行われた［立石 2002:137］。また、地域や時間割が非常に限定されていたものの、学校教育においてカタルーニャ語が取り入れられるようにもなった［Soler 2009:125］。カトリック教会の支援により、カタルーニャ語のミサも行われるようになった［Giori 2012:165］。こうして、言語を中心としたカタルーニャの文化は、フランコ独裁体制に対する間接的な抵抗の象徴として、人々により強く意識されるようになった。これに対抗し、求心力が弱まりつつあったフランコ体制も、人間の塔をシンボルとして利用しようとしていた。人々の支持をつなぎとめるために、フランコのイメージを、十字軍（スペイン内戦）と経済成長を成し遂げたスペインの救世主として描き出すことで、国民の思想統一を図っていた。さらに国家による単一文化政策をスペイン全土で推し進めることで、国民の日常を体制に取り込み、体制への従順さを植え付けようとしていた［Giori 2012:168-170］。人間の塔は引き続き、二つの全く異なった政治勢力により、シンボルとして利用されたのである。

こうした二つの政治勢力との関係性は、人間の塔のメンバーの間に対立をもたらした。さらに人間の塔の内部では、その意味についても新しい議論が生まれつつあった。それは、人間の塔における 2 つの正反対の側面、つまりコーリャ間の競争を重視するのか、コーリャ間の協調と友和を重視するのか、という議論である。前者を支持する人々は、スポーツに価値を見出す 60 年代の風潮に影響を受け、人間の塔はスポーツであるから競争は当たり前のことである、と主張した。当時は、商業的なコンクールや祝祭での実演が急増していた。ここでより高い塔を立てて他のコーリャに勝利することは、より多くの収入を得ることに繋がった。これに対し後者を重視する人々は、人間の塔

の基礎に友情や絆や仲間意識を据えようとした［Giori 2012:179］。この風潮を示す事例が、タラゴナのコンクールである。このコンクールは、1932 年から断続的に行われており、長年競争が重視されてきたが、この頃から友和の精神が重視されるようになった［Bertran 2011:42］。また、コーリャの技術も議論の対象となった。スポーツや競争を重視する風潮の中で、いくつかのコーリャは新しい技術を使ってより高い塔を作ることに成功したが、このことに対し伝統的な技術を重視する人々が苦言を呈した。競争と協力、伝統と革新など、それまででは考えられなかったようなテーマが、議論の遡上に乗ることとなった。

(5) 1975 年から 1981 年

1) 人間の塔―「新しいカタルーニャ」のシンボル―

1975 年のフランコの死により独裁体制が崩壊したのち、スペインは民主主義国家となった。新しい自治州制度の導入後、カタルーニャでは 1977 年に、カタルーニャ自治州の自治憲法が公布され、自治州政府が復活した。州政府には、憲法に基づいて「ほぼ国家」［Clau i Fainé 2014:88］のような大幅な権限が認められた。このことにより、カタルーニャは政治的・経済的・社会的な実体を持ったネーションとして、人々に認識されるようになった。こうして自治州政府は、カタルーニャ主義が地域ナショナリズムに変化する素地を作ったのである。

新生自治州政府の課題となったのは、ネーションの構成員を作るということであった。それは換言すれば、内戦の勝者や敗者、内戦後に生まれた世代、「新しいカタルーニャ人」である国内移民など、立場や出自の違う全ての人々の中に、どのようにカタルーニャ・ネーションの一員であるという自覚を生み出すか、という問題であった。その解決策の 1 つとなったのが、カタルーニャ語であった。教育面では、全ての授業をカタルーニャ語で行い、カスティーリャ語やその文学は教科の一つとして教えるという、カタルーニャ語優位なバイリンガルの公教育が始まった。こうした教育は、教科書の作成やレクリエーションなど、カリキュラム内外での様々な実践により支えられた。伝統的にカタルーニャ語を使ってきた家庭や、国内移民第一世代の保護者、教師が、カタルーニャ語での教育を支持していた。また、カタルーニャ政府の諸機関や公的サービスがカタルーニャ語化され、特定の公職に就くためには語学証明が必要になりさえした。加えて、カタルーニャ語による公共放送や新聞の発行、カタルーニャ語での

書籍出版・パソコンの機能設定・舞台作品の上映・インターネット上でのサービス・映画の吹き替えなど、様々なサービスの提供がカタルーニャ語によって行われるようになった。さらに、経済的に裕福なカタルーニャを目指してやってきた移民に対し、カタルーニャ語を学習する機会を提供し、彼らの社会的な統合を促した［Soler 2009:124-125］。

また、さらにそれは、構成員に、カタルーニャ州を独自性・有価性・主権性を持った存在として想像させるためには、どのようなものがネーションのシンボルとしてふさわしいか、という問題でもあった。様々な伝統の中から、人間の塔は、ネーションのシンボルに最もふさわしいとされた。このシンボルは、「民主主義」、「コミュニティ主義」、「社会的統合」、「近代化」という、新しいカタルーニャ・ネーションの価値観を表していると考えられた。人間の塔はネーションの「伝統」であり、「均衡」、「調和」、「多様な人々の協力による美」など、カタルーニャ人の伝統的なアイデンティティの基盤であるとされた［Giori 2012:186-187, 190-193, 2014:163-164］。特に協力という概念は、人間の塔が広く浸透するために重要な概念であったとして、その歴史と関連して正当化された［Vallecillo 2006:139］。その一方で人間の塔は、民主主義や近代化などの新しさをも表現していると考えられた。こうして若い世代を中心に、人間の塔にカタルーニャの美徳を見出す人々が増えていった［Giori 2012:187］。人間の塔は神話化され、地域性のシンボルからカタルーニャ地域全体のシンボルへと、その意味を大きく変容させたのである。このプロセスは 150 年ほど前にサルダーナに対して起こったプロセスと、非常に似通っている。

コーリャ内でも、政治の民主化に触発された新しい動きが起こった。その一例が、組織の変化である。以前、コーリャはキャプテンのカリスマ性に頼って運営されていたが、その仕事が様々なメンバーによって分担されるようになった。運営に携わるメンバーが増え、組織は複雑になった［Giori 2012:194］。また、人間の塔を女性がコーリャのメンバーとして塔に登るようになった。この頃までカタルーニャの祭りにおいて、女性は舞踊以外の芸能に参加することができなかった。しかし、民主主義の影響を受けて、人間の塔を含む様々な芸能に参加することが認められるようになっていった。このことは更なる技術の変化を引き起こし、より高い塔を組み立てることを可能にした。彼女たちは、人間の塔を通じて、コミュニティへの社会参加を果たしていった。また女性が参加できるようになったことで、一家そろって参加するメンバーも増え始

めた［Bertran 2011:43］。さらに、それまではコーリャに存在しなかったような、自由主義者や学生も、積極的にメンバーとして受け入れ始めた。このことは、メンバーの年代や社会階級を一新させ、低所得者による賃金目当てのパフォーマンスという人間の塔の従来のイメージを、大きく変えることとなった［Bertran 2011:42］。

さらに、カタルーニャ語を媒介に、カタルーニャ主義に接近していくコーリャも増え始めた。こうしたコーリャでは、練習中にカタルーニャ語を使い、非カタルーニャ語話者に対しては語学面の援助を申し出ることで、コーリャのメンバーをカタルーニャ語のもとに統一させようと試みた［Giori 2012:194］。また政治家も、積極的に人間の塔を鑑賞することで、両者の結びつきをアピールした［Bertran 2011:42］しかし様々なコーリャが存在したことから、全てを一律に論じることはできない。コーリャの中でも、カタルーニャ主義へ接近するコーリャと距離を置くコーリャがあった［Giori 2012:194］。

2) サルダーナ―過去の象徴として―

一方でサルダーナは、すでに過去の栄光の象徴になりつつあった。サルダーナはフランコ時代の抵抗の象徴として捉えられていたため、フランコ死後の新しいカタルーニャを作るという運動やその価値観にはそぐわないと考えられた。若い世代は、サルダーナは民謡的で静的であり、民主主義や近代化という新しい時代の流れを体現していないと考えた。またサルダーナでは、国内移民をカタルーニャ社会に統合することはできなかった。サルダーナは社会的意味を失い、新しい参加者を獲得できなくなっていった［Giori 2012:186-187］。このことは、人間の塔に付与された意味を追っていくことによって、理解できる。例えば、「友愛」「調和」「コンビネーションによる美」など、1960 年代から 1970 年代にかけて、人間の塔に付与されていった概念は、もとをたどればサルダーナが体現していると考えられていた価値観であった［Giori 2012:189］。民主主義の到来や移民の流入という時代背景は、カタルーニャ・ネーションのイメージを変更し、そのシンボルまでも変更させたのである。

ジオリは、サルダーナが社会的意味を失っていった理由を明言していないが、筆者はサルダーナの性質がその一因であると考える。前述したように、サルダーナは非常に静かで、ともすれば哀感を感じさせるような舞踊である。そのような舞踊は、若年層にある種の「古臭さ」を感じさせてしまったのではないだろうか。また、サルダーナ

を踊っている途中は一切会話をしないため、言葉によるコミュニケーションは断絶されてしまう。さらに、ステップが独特で複雑なため、一度それを覚えなければ、輪の中に入るのが難しい。こうした特徴が、新しいメンバーの参入を難しくさせている。これは、言葉によるコミュニケーションを必然的に伴い、初心者でも飛び入り参加ができる人間の塔とは、対照的である。総じて、サルダーナが均質性を軸とするのに対し、人間の塔は多様性を受け入れやすい性質があるため、社会統合により適している芸能といえるだろう。カタルーニャ主義者は、人間の塔の性質を巧みに利用し、新しいネーションの意味をこの芸能に仮託したのである。

(6) 1981 年から 2000 年代

人間の塔とカタルーニャ主義の結びつきは、その後さらに強くなった。両者は社会的な意味付けにおいて、相互に作用し依存する存在となった。人間の塔は、政治的・文化的な意味で民主主義のカタルーニャを作るという意味を付与されるようになったのである。人間の塔はカタルーニャ社会を代表する存在であり、人間の塔に参加することがカタルーニャを作る、という言説が生まれた。例えば、カタルーニャ州はラテンアメリカやアフリカなどからも移民も受け入れ始め、さらなる多様性を受容するようになった。人間の塔もまた、彼らを受け入れ、彼らの社会統合を促進する場となった。これには、国内移民を統合した時の経験が生きていた［Vallecillo 2006:141］。メンバーが多様化することによってコーリャの参加者数も増加し、100 人から 300 人という大規模なコーリャが生まれた。まさに人間の塔ブームが起こったのである。このことは技術の革新や組織改良を可能にしたが、一方で絶え間ない競争意識を生んだ［Giori 2012:187-188; 2014:164］。

民主化の過程で、自治州政府はカタルーニャ州の「カタルーニャ化」を進めた。彼らは、その中心にカタルーニャ語を据えた。カスティーリャ語に対するカタルーニャ語の方的優位性を明確にしようと、1983 年には言語正常化法が、1989 年にはこれをさらに強化した言語政策法が施行された。後者は、カスティーリャ語擁護派からの根強い反発を受けて一部を訂正せざるをえなかったものの、学習と法律を一体化した言語推進政策により、カタルーニャ・ネーションが実体化する大きな力となった。従って、この時期のカタルーニャ主義の特徴は、「言語＝文化的一体性」であり、カタルーニャ人である要件として、全てのカタルーニャ住民はカタルーニャ語を習得すべきである、

と考えられていたことであった［立石 2002:99］。
その後、1990 年代から 2000 年代にかけて、ラジオやテレビなど、メディアによる注目が高まった。また役所や州政府の支援により、人間の塔は広く社会的に認知された。2010 年に、UNESCO の世界無形文化遺産登録に登録されたことは、その大きな成果と考えられる［Giori 2014:166］。人間の塔は、カタルーニャ・ネーションのシンボルとしての位置を不動のものにし、現在へ至っている。
また、実演される塔のレベルは上がり続けている。1981 年に、20 世紀で初めて 9 層の塔が完成したのを皮切りに、様々なコーリャが 9 層の塔を完成させるようになった。1998 年には、1801 年の記録を最後に成功例がなかった「10 層の 3 人、補強と腕輪つき」が完成した［Bertran 2011:43］。

以上のように、カタルーニャ州では 1960 年代から、カタルーニャ州がネーションであると想像しやすい状況が作り出され、維持されていった。この想像力は、人間の塔を媒介として最大限に発揮された。カタルーニャ主義やカタルーニャ社会全体からの意味の付与が、現在の人間の塔のイメージに大きく関わっている。その一方で、フランコ独裁下における体制との結託は、現在のコーリャの組織や体質に大きな影響を及ぼしている。「フランコ体制への抵抗とその後の民主化」という文脈で語られやすい人間の塔だが［山道 2015:16］、歴史的に見れば、カタルーニャ地域のシンボルという意味だけを付与されてきたわけでは決してない。むしろ現在の人間の塔は、フランコ体制とカタルーニャ主義の両方から利用されることで生まれた。この点で人間の塔は、カタルーニャ主義の純粋な産物ではなく、フランコ体制とカタルーニャ主義の両者により育まれてきたのである。
一方、人間の塔が喚起するネーションに対する想像力は、スペインからの独立を具体的に想像することにまでは発展していなかった。民主化後、大半のカタルーニャの人々は、スペイン国家の一部としてのカタルーニャ州の政治的な在り方に満足していた。独立支持派は少数派で、「たまねぎ人間」（カタルーニャ語で、行き過ぎた思想を持つ人、頑固な人の意味）と言われていた［Clua i Fainé 2014:85］。それではなぜ、現在独立の要求、即ち地域ナショナリズムが高まっているのだろうか。人間の塔はそれに、どのような意味を付与しているのだろうか。

２．現在のカタルーニャにおける地域ナショナリズム―「地域ナショナリズム＝民主主義」論の台頭

カタルーニャ州において地域ナショナリズムが浸透するのは、現在のスペイン社会に対する不満が、かつてないほど高まっているからである。現状を変革するためのもう一つの選択肢として、上述した過程で形成され維持されてきた「カタルーニャ」というネーションが、注目されている。

特に不満が出ているのは、政治と経済の側面である。政治的な不満の端緒は、2000 年代であった。2000 年の総選挙において、中道右派政党「国民党」（PP, Partido Popular）が絶対過半数を獲得したことで、スペイン政府は再中央集権政策を開始した。これは、地方分権制度によって各自治州に移譲された権限を再びスペイン政府に集約させる、というものである。さらに政府は、スペインのナショナリズムを煽るため、後のラホイ政権に受け継がれる、強力な反カタルーニャ州キャンペーンを行った。このような動きに対し、カタルーニャ州の人々は、民主化時に認められた自治権が再び剥奪され、抑圧が復活するのではないか、という危機感を強めていった。2003 年の地方選挙では、長らく自治州政権を掌握してきた「集中と連合（Convergència I Unió）」党が、独裁終了後初めて下野し、替わって左派 3 党による連立政権が発足した。彼らが取り掛かったのは、自治州の憲法に当たる自治憲章を改定し、その中に自治権を明文化する作業であった。自治憲章に「カタルーニャはネーションである」と規定することは、カタルーニャ州の自治権に更なる法的根拠を与えることを意味したからであった。新自治憲章は 2005 年に自治州議会を通過し、国会に送られたが、国会内の反発によって、度重なる改訂を余儀なくされた。2006 年、新しい自治憲章は最終的に国会を通過し、カタルーニャ州の住民投票によって可決され、施行された。しかし、スペイン政府が、新憲章に 7 つの違憲性が認められるとして憲法裁判所に提訴した結果、2010 年に裁判所は違憲の判決を下した。これに衝撃を受けたカタルーニャ州の人々は、2010 年 7 月 10 日、諸政党の呼びかけに従って、バルセロナで大規模なデモを繰り広げた。約 110 万人が参加したこのデモでは、「私たちは一つのネーション。私たちが決める」（Som una nació. Nosaltres decidem）というスローガンのもと、「自決権」（dret a decidir）の尊重が叫ばれた［奥野 2015:141-143］。自決権とは、自分たちの政治的な未来を決める権利であり、独立をめぐる住民投票を実現させる権利である［奥野 2015:141; 山道 2015:7］。初めてこの言葉が使われたのは 2006 年であったが、この頃には民主主義に

おける正当な権利として、カタルーニャ社会の様々な出自・階層の人々に認知されていた。そして、地域ナショナリズムにおいて、独立と並ぶ重要なテーマとなった。この違憲判決とデモを境に、カタルーニャ・アイデンティティを自覚する人が現れ始めた［奥野 2015:143］。

さらに 2011 年、国民党のラホイが政権を獲得すると、再中央集権化と反カタルーニャ州キャンペーンが、より強く推し進められた。カタルーニャ州の人々の不安が増大し、自覚的なカタルーニャ・アイデンティティを持つ人々が増えていく中で、2012 年 9 月 11 日、非政党組織「カタルーニャ国民会議」（ANC, Assemblea Nacional Catalana）の呼びかけによって独立を求めるデモが行われた。このデモは、さらなる人々にカタルーニャ・アイデンティティへの発露を促した。直後の同年 11 月に行われた自治州選挙では、自決権を支持する 4 政党が勝利を収め、翌 2013 年 9 月 11 日のデモ「カタルーニャの道」(9)では 160 万人が人間の鎖を作るなど、地域ナショナリズムは圧倒的な速度で人々の間に浸透していった。しかし、こうした動きに対し、スペイン政府は強硬な態度で臨んだ。2014 年 9 月に予定されていた、カタルーニャ州の独立についての住民投票は、スペイン政府の度重なる憲法裁判所への提訴と裁判所の違憲判決により、実施が困難になった。そこで、投票は非公式な意見集計という形式で行われた。カタルーニャ州の人々は、カタルーニャの自決権を頑なに拒否するスペイン政府に苛立ちを募らせ、スペイン内にこれ以上留まり続けることはできない、と感じ始めた。彼らの不満を明確に表しているのが、カタルーニャ州で実施された、同州にとって最善の国家の形式を問うアンケートの結果である。それによると、2011 年頃から、連邦制への支持が急落し、独立への支持が急増し始めた。このように、スペイン政府の再中央集権化の言説や強硬な態度こそが、カタルーニャ州の人々に自決権が剥奪されるかもしれないという不安や、これ以上スペインに留まり続けスペイン政府に交渉しても何にもならないという反感を抱かせ、地域ナショナリズムに向かわせる原因となっているのである［奥野 2015:131,143］。筆者が実施したフィールドワークにおいても、独立支持派からは、スペインの強硬な姿勢を憤り「もうこれ以上は我慢できない」という主張が多数聞かれた。

一方経済面では、生活への不安感が、自治州間の不均衡な財政負担とあいまって、閉塞感を高めている。リーマン・ショックに起因するスペインの経済危機は、経済力の強いカタルーニャ州にも影響を及ぼした。厳しい状況の中で、人々の生活への不安は

増大している。さらに、人々の生活を保障するはずの自治州政府は、財政基盤をスペイン政府に頼っており、スペイン政府が財政危機に陥ると、自治州の財源も同時に激減した。特に、カタルーニャ州の政府財政赤字の負担分として、スペイン政府が 2011 年から 2012 年にかけて予定されていた競争力基金の前払いを行わなかったことは、自治州の財政にとって大きな痛手になった。この基金が、州政府の財源の半分を占めていたからである。こうして、最終的にカタルーニャ州政府は、2012 年にスペイン政府に救済を申し入れた。このことはカタルーニャ州の人々の目に屈辱と映った。人々は、カタルーニャの経済資源がスペイン政府に余分に徴税される一方、スペイン政府は徴税された分の利益をカタルーニャ州に戻そうとしていないと考えたのである。スペインへの反感は高まり、「スペインは我々から盗んでいる」（Espanya ens roba）というキャンペーンも行われた。経済に関する不満は、フィールドワークの際も度々耳にした。筆者の友人であるアルベルは、「カタルーニャは自らの税金をスペインに奪い取られている」と筆者に語った。さらに彼は、同じく独立運動が盛んなバスク自治州とカタルーニャ州とを対比させ、「バスク人はテロをしたから、税が軽減された。カタルーニャ人は平和的に抗議するから、軽減されない。バスクは自分の権利を失うことを恐れているから、カタルーニャを全く支援しない」と主張した。さらにカタルーニャ州の人々は、露呈した自治州政府の財政基盤の脆弱さとそれに端を発する権力基盤の弱さは、カタルーニャ州がスペイン国家内に留まる限り、即ち自治州政府の上位組織としてスペイン政府が存在する限り、今後も継続すると考えている。人々は経済的不安と生活の保障が何もない原因を、強硬な態度を貫くスペイン政府に見出していたのである［奥野 2015:147］。

こうした閉塞感に追い打ちをかけたのが、2012 年に制定された「教育の質を改善するための組織法」（通称ベルト法）である。この法改正は、教育の再中央集権化を目指したもので、現行憲法が施行されてから各自治州に移譲されてきた教育政策の権限を、スペイン政府に再度戻そうとする動きである。改正法では、主にカリキュラムについて変更された。改正法前は、固有語を持つ自治州では、スペイン政府が定めるカリキュラム内容を行うための授業時間数は、55%であった。その他の 45%の授業時間数の内容は、自治州の裁量に委ねられていた。しかし法改正によって、スペイン政府が定める授業数の分量を、従来の 55％から 65％にすることとなった。また、授業科目を時間ごとに三種類に分け、カタルーニャ語に関する授業を、一番授業時間の少ない部類

（必修時間の定めがない種類）に区分した。このことは、カタルーニャ語の浸透を最重要課題とし、カタルーニャ語を公教育語として進められてきたカタルーニャ州の教育を正面から否定するものと言える。さらに、この法律に関係して、カタルーニャ語の教育を否定する判決が、次々と出されている。例えば、クラスの中で一人でもカスティーリャ語(10)の授業を望む生徒がいれば、そのクラスではカスティーリャ語で授業をしなければならない、とするものや、授業の 4 分の 1 はカスティーリャ語で行われるべきというもの、カスティーリャ語での授業を望んでいる生徒や保護者が、公立学校でそのような授業が受けられず、私立学校に移る場合、授業料の差額を自治州政府が支払わなければならない、というものなどである。こうした動きは、スペイン政府によるカタルーニャ語や文化の抑圧と受け止められており、カタルーニャ州の人々のスペイン政府に対する反発をますます助長している［奥野 2015:151-153］。筆者は、このことを象徴するエピソードを聞くことができた。前述したアンリックの妻パトリシアと、二人の娘で中学生のライアと会話していた時である。

パトリシア：私たちは、スペイン人とうまくいっていないわけではないの。でも…
ライア：私はうまくいってないけど。
筆者：え、そうなの？なんで？
ライア：だって、好きにさせてくれないから。
パトリシア：ああ、独立させてくれないから…
ライア：だって、学校でカタルーニャ語でじゃなくて、スペイン語で教えさせようとするから！

こうしたスペイン政府への不満を背景に、近年カタルーニャ地域ナショナリズムのヘゲモニーが変質している。前述した言語＝文化一体論から、独立と自立権の要求こそ正しい民主主義に基づく新たな政治参加の形であるという主張、即ち「地域ナショナリズム＝民主主義」論へ、一般的な言説が変化してきているのである。クルア・イ・ファイネは、「「下からの」民主的革命は、現在の民主主義代議制というモデルの破綻と、幅広い年代の市民が彼らの未来を決定するために活動していることへの認知を宣言しているが、カタルーニャの場合は、希望と変革への幻想を担保できる新国家建設への要求にそのはけ口を見出した」［Clua i Fainé 2014:93］と述べる。つまり、現在の

不均衡な社会の代替案として、歴史的に構築され強化されてきた「カタルーニャ・ネーション」という概念が、かつてないほど脚光を浴びているのである。このように、2010 年以来のカタルーニャ州における地域ナショナリズムの浸透と独立運動の高揚は、「カタルーニャ」という政治的・経済的・社会的に半ば実体化された枠組みが、スペイン政府に対する人々の不満によって活性化された結果といえる。独立支持派の人々は、現在の社会の枠組みでは実現できない理想的な社会を、独立国家カタルーニャに仮託しているのである。そして新社会、即ち独立後のカタルーニャを求める欲求は下からの「民主的革命」であり、市民による民主主義の直接的な表現と捉えられる［Clua i Fainé 2014:93］。このため、地域ナショナリズムの文脈の中で、独立運動は、市民による直接的で新しい政治参加の形であり、それこそが機能不全に陥っている民主主義を再生する鍵であるとして、正当化されている。

地域ナショナリズムが正当化される要因の一つに、その運動の主体がある。地域ナショナリズムの中心となっているのは、政治家ではなく、市民の団体や自治会である。言語＝文化一体論は、CiU とその党首プジョルが先頭に立って推進してきた。しかし、2003 年における CiU の下野と、国内移民を支持基盤に持つ左派三党の連立政権の発足は、より多様な出自・階層の人々が、政治に参加する素地を作った［奥野 2015:141］。こうした政治変動の結果、近年の地域ナショナリズムの主体は市民団体となり、彼らが支持する「地域ナショナリズム＝民主主義論」が政治を動かしている。2011 年から 2013 年にかけて、市民団体が独自で行った独立に関する意見集計は、市民団体の運営能力や浸透ぶりをアピールしただけではなく、独立派のプレゼンスを明らかにし、政治家に独立を現実問題として捉えさせた。こうした意見集計には法的拘束力が認められないため、いかなる結果が出たとしても、集計は現実的な効力を持つことはできなかった。しかし意見集計の象徴性は、逆に実際の運動の起爆剤となったのである［Clau i Fainé 2014:90］。また、非政党組織である市民団体 ANC が設立されたことは、カタルーニャ地域ナショナリズムが、政治家の扇動による「上からのナショナリズム」ではなく、大衆を巻き込んだ「下からのナショナリズム」という特性が強いことを印象付けた。

また、独立支持派は、独立という賛否両論ある問題だけではなく、市民国家や民主主義に依拠する自決権という概念を、独立運動の中心的なテーマに据えた。これにより彼らは、地域ナショナリズムに正当性を付与し、様々な思想の人々を包摂することに

成功した。山道は、カタルーニャにおける地域ナショナリズムの特徴を、その焦点が独立そのものではなく、自決権の要求にあったことであると指摘し、「独立は支持しないが自決権は支持する」「スペインが投票を認めてくれるならスペインに留まるが、認めてくれないので独立を支持する」という意見が多くあったことを述べる［山道 2015:7］。さらに、「地域ナショナリズム＝民主主義」論は、自らをスペイン国家と対置することで、より強くその正当性を印象付けている。独立や自決権を否定するスペイン国家を非民主的であると非難することで、自身が民主主義の原則にかなっているということを、より強く内外に主張することができるからである。このように自決権と独立は、地域ナショナリズムの目的でもあり、それを支える市民を一つにまとめる手段でもある。

それでは、このような社会変化を受けて、人間の塔に付与されるイメージはどのように変化しているのだろうか。次節では、人間の塔を鑑賞する人々とコーリャのメンバーを対象に行ったフィールドワークの結果をもとに、人間の塔にまつわる言説を探る。

３．考察―人間の塔に何を見出すのか

(1) 人間の塔を鑑賞する人々

1) 市民団体や政治家の視線―政治的シンボルとして

人間の塔の実演は都市の祝祭で行われるため、その観客は不特定多数であり、一概にその意見を論じることはできない。しかし、人間の塔とカタルーニャ・ネーションとを結び付けて想像する人々がいることは、明白である。

その事例として、オムニウム・クルトゥラウ（Òmunium Cultural）が、自らの主催するイベントに、人間の塔の参加を要請したことが挙げられる。オムニウムが開催したイベントの中で、人間の塔に関わるものは、毎年ディアーダに開催される独立を求めるデモと、2014 年に行われた「Catalans want to vote; Human Tower for Democracy」がある。前者は 2011 年から始まり、地域ナショナリズムの隆盛に基づいて、独立を「回復」したいという人々の望みを示す行動となった。2012 年に、初めて CB（Castellers de Barcelona）に参加を打診している。CB はこれを受け入れ、以降 2015 年に至るまで、毎年参加し続けている。人間の塔のメンバーは、バルセロナ全体を舞台にして行われるデモのただ中で、複数回に渡って塔を実演する。これに対し、後者は、2014 年の国

民投票違憲決定を受けて行われた国際的なイベントである。2014 年 7 月 8 日 12 時（カタルーニャ時間）、カタルーニャ内外の約 70 市町村において、人間の塔が同時に実演された。実演が行われた都市の中には、EU 加盟国の主要都市である 8 都市（パリ、ロンドン、ベルリン、ブリュッセル、リスボン、ジュネーブ、バルセロナ）も含まれていた。このイベントの目的は、スペイン政府がどのような決定をしようとも、カタルーニャ人は国民投票を強く望んでいるということを、EU 加盟国に向けて発信することであった。そして、カタルーニャ人の望みを強く印象づける手段として、他のシンボルではなく、人間の塔が選ばれたのである。

筆者が 2015 年 5 月 7 日に行ったインタビューの際、オムニウムの代表マルセ・セラは、種々のイベントのために人間の塔を選んだ理由として、「全員が一つになって高い塔を作りあげる人間の塔には、強烈なインパクトがある」ためであると語っていた。また彼女は、人間の塔を、①カタルーニャの社会的統一性、②自由と民主主義のための戦い、③メンバー全員の協力、④平等性の象徴であり、カタルーニャ独立のメタファーであるとも述べた。こうした見方は、前述した 1970 年代以降人間の塔に付与され始めた意味を踏襲していると同時に、それらが実現した形として、独立という意味も付与している。”Catalans want to vote; Human Tower for Democracy”の宣伝用動画にも、こうした「理想化された人間の塔」像がはっきりと述べられている [(11)]。この動画は 2 パターンあるが、その内の一つには、「よりよい国」、「民主主義」、「調和」、「共通の目的」、「すべてのメンバーが共に」など、人間の塔が体現していると彼らが考える価値観や理想が語られている。そして、この背景画像として、集中して人間の塔を組み立てる人々や、塔の成功を喜び合う人たちの画像を映すことで、「高く伸びる人間の塔」と、「投票や独立という目的を達成するカタルーニャ」というイメージが重ね合わせられている。このようにオムニウムは、人間の塔をネーションのシンボルとみなすと同時に、独立や自決権といった、正当な政治的価値観を体現するシンボルと見なして、独立運動をも仮託しているのである。さらに、「市民の意思を体現する投票＝民主的、それを許さないスペイン国家＝非民主的」という言説はここでも見られる。このことは、動画が EU 諸国を対象として想定していることを考えると、大きな意味を持ってくる。なぜならば、民主主義は EU 統合の理念であり、EU が普遍的価値として推し進める価値観の一つであるからである。こうして見ると、「地域ナショナリズム＝民主主義」論は、カタルーニャ内で違う意見を持っている人々を地域ナショナリズムに集約

させるだけでなく、対外的にカタルーニャの正当性をアピールするための武器としても、機能しているのである。

また、オムニウムと同様に、人間の塔を通じて政治家が政治的メッセージを伝えようとした出来事もあった。それは、2015 年 9 月 24 日、バルセロナ市のサン・ジャウマ広場で起こった。この日は、バルセロナ市の守護聖女である聖マルセの日であったため、町では様々な催し物が行われていた。人間の塔や巨人人形(12)など、カタルーニャの伝統芸能は、市庁舎と州議会が置かれているサン・ジャウマ広場で、実演されることになっていた。この日は、バルセロナで活動する 6 つのコーリャが一堂に会する日であるため、コーリャのメンバーにとっても普段以上に気持ちが高揚する日であった。いつも通り、コーリャのメンバーは、実演開始の一時間前を目途に別の広場に集まった。そこで衣装の準備や楽器の音合わせを行った後、それぞれの楽隊に率いられて、12 時 5 分ころサン・ジャウマ広場に入場した。雲一つない、抜けるような青空のもと、広場は人間の塔を一目見ようと集まった観客で溢れかえっており、コーリャのメンバーも容易には入場できないほどであった。こうした祭りにおける決まりで、コーリャは入場してすぐ「6 の柱」を立てなければならない。そのためメンバーが観客を追い払いながら、慌ただしく 6 の柱を組み立てていた時、市庁舎のバルコニーから、大きなカタルーニャ独立派の旗が吊るされたのである(13)。これを吊るしたのは、独立を強力に支持する「カタルーニャ共和主義左派」（Esquerra Republicana de Catalunya）の地区会長、アルフレッド・ボッシュであった。そして、この旗が吊るされた瞬間、見ていた人々から大きな歓声が上がり、「独立！独立！」という叫び声(14)が沸き起こった。しかし次の瞬間、すぐ隣に立っていた右派の国民党の政治家、アルベルト・フェルナンデス・ディアスが、スペイン国旗をバルコニーに吊るした。これに対して、大勢の観客やコーリャのメンバーが猛反発し、抗議の口笛を吹いたり罵声を上げたりして、会場は異様な雰囲気に包まれた。15 秒ほどして、両方の旗が下げられたあと、観客からはまた、「独立！独立！」のコールが沸き起こった。

他の伝統芸能の催しも行われていた中、わざわざ人間の塔の実演に合わせて旗を吊るしたところに、ボッシュの意図が透けて見える。彼は明らかに、人間の塔を通じて独立のメッセージを訴えかけようとしていた。ボッシュはオムニウムと同じく、独立支持という地域ナショナリズムのメッセージを、より効果的に演出するための場として、人間の塔の実演を選んだのである。「国民」党の政治家が、対抗してスペインの国

旗を吊るしたことで、カタルーニャとスペインという対比構造が繰り返され、そのメッセージはより強烈なものとなった。

2) 観光客の視点―カタルーニャの文化的シンボルとして―

市民団体や政治家が、人間の塔に意味を付与する一方で、コーリャの人々自身が、自らがカタルーニャを代表していると感じる瞬間がある。それは、彼らがカタルーニャ人以外の人々の視線にさらされた時である。人間の塔はいまや、バルセロナを訪れる観光客に人気の伝統芸能となっている。人間の塔の実演では、カメラやビデオを片手にした観光客が、人間の塔の周りを取り囲む。こうした観光客への対応として、コーリャのメンバーが手をつないで円を作り、人間の塔を作るためのスペースを確保することもしばしばである。また、実演だけでなく人間の塔の練習も、観光客の注目の的である。人間の塔の練習場は、バルセロナの観光ツアーの一部として組み込まれており、しばしば大勢の観光客がやってくる。彼らは、中庭の階段や練習場の三階のバルコニーから、コーリャのメンバーが組み立てる塔を見て、写真やビデオを撮影したり、拍手を送ったりする。観光客のこのような視線は、人間の塔をカタルーニャでしか見られない「珍しいもの」「独自のもの」として描き出す。その視線を受けて、コーリャのメンバーの中にも、人間の塔をカタルーニャ独自のものとして見る視点が生まれるのである。また、外国への巡業も、彼らに人間の塔がカタルーニャを象徴していることを再確認させる。CB のメンバーであるジュアンは、「パリとか他の国の都市に行くと、カタルーニャでやる時よりも大きな拍手がもらえたりする」「自分たちの土地にはないものだから、余計感動するのだろう」と、嬉し気に、かつ誇らしげに筆者に語った。このように、コーリャのメンバーは、外部者である観光客を通じて、自分たちがやっていることがカタルーニャの伝統であるとし、人間の塔とカタルーニャとを結びつけて考え始める。このように、人間の塔というシンボルを媒介して、カタルーニャ・ネーションが構成員に意識づけられていくのである。一方で、人間の塔は一つのナショナルな境界線となり、コーリャのメンバーとそれ以外の人々を、ゆるやかに、しかしはっきりと区別している。

外部の視線の一方で、コーリャのメンバーの中では、ネーションのシンボルとして人間の塔を見ようとする視点に対して、様々な意見がある。外部からの視点のように、ネーションと人間の塔を結び付けて考えようとする意見がある一方で、それに戸惑っ

たり反対したりする意見もある。次項では、両者の言説を探りながら、人間の塔を実演する人々が、人間の塔をどのように捉えているのか考察する。

(2) 人間の塔とカタルーニャを結び付けようとするコーリャのメンバー

コーリャの内部には、独立支持派が多数存在する。彼らはどういった特徴や要素を根拠に、カタルーニャを人間の塔に仮託しようとしているのだろうか。

1)「カタルーニャ人性」

まず挙げられるのは、人間の塔がカタルーニャ人の性格を象徴している、という言説である。20 年以上人間の塔に参加し続けているジョルディは、人間の塔は「カタルーニャ民族」の象徴であり、自分たちが一つの国家であるという気持ちを表現するものだ、と筆者に語っていた。また彼に加えて、同じく人間の塔を長く続けているチャビも、人間の塔に特徴的な 4 つの「共通した感情」を説明してくれた。それは、①力、②均衡、③勇気、④セニィである。セニィとは、カタルーニャ語で、冷静沈着な判断力を指す。これの反対語はグラシャであり、「それ行け！」という勢いや情熱を表す言葉である。チャビは、「セニィがあったから崩れないし、グラシャがあったから落ちなかった、という風に」と筆者に語り、この 2 つの気質が最終的に人間の塔を成功させるコツであることを強調した。そして彼らの語りに共通していたのが、これら 4 つの要素が非常に「カタルーニャ的」であり、カタルーニャ人やその社会をよく表している、という言葉である。ジョルディはこの 4 つを、「人間の塔はカタルーニャ人の生き方・あり方だ」と述べた。ジョルディもチャビも、「いいと言われたら今すぐスペインから出ていきたい」というほどの独立支持派である。しかし彼らは、人間の塔は単なるカタルーニャの独特な文化であり、文化と政治は切り離して考えるべきであるとして、人間の塔と地域ナショナリズムを関連付けることはしない。だが、人間の塔のこうした特徴を、カタルーニャの性質に結び付けて語るということは、人間の塔とカタルーニャの間に関係性を見出している、ということに他ならない。

2) 社会的統合

筆者がコーリャで驚かされたことの 1 つに、メンバーの多様性がある。

1 つは、出自の多様性である。筆者はコーリャのメンバーであるアントニから、こう

した多様性の一端を聞くことができた。アントニはメンバーの具体例を挙げながら、コーリャのメンバーがいかに多様性に富んでいるかについて、筆者に説明した[15]。 このように、カタルーニャ地域外出身者がコーリャにいるということは、人間の塔やコーリャのメンバーが、いかに他者に対して寛容であるかということの象徴となっている。いわば、彼らは「シンボル内のシンボル」なのである。

人間の塔によって統合されるのは、カタルーニャ以外の出身者だけではない。大学入学のためにバルセロナ以外の都市からやってきた学生も、メンバーとして統合されうる。バルセロナに近いグラノジェルス出身のカルマは、知り合いを作るためにコーリャに入ったと話していた。彼女はコーリャに参加し始めたきっかけを、「私はここの出身じゃなくて、知り合いが誰もいなかったから」であると筆者に語った。今では、コーリャはもう 1 つの家族のようだとも述べる。

また、身体や知的障がい者が活動に参加していることも、コーリャの多様性と寛容さの象徴となる。筆者はある練習で、足に障がいを持ち歩行器を使っていた青年に話を聞く機会を得た。それによると、彼は友達に誘われて何気なく練習を見に来たが、見ているうちにとても感動して、魅せられてしまったという。彼はコーリャのメンバーが、彼を歓迎しごく自然に扱ってくれるのを感じて、とても嬉しかったと筆者に語った。時には見ているだけではなく、参加することもあるという。またチャビは、ダウン症の少女を例に出し、塔に登ることができなくても、彼らは下、即ちピーニャの外側で支えることができる、と話した。

さらに、年齢層も様々である。アントニや、バルのコックでコーリャのメンバーであるアンリックは、「人間の塔には、全ての人々が参加できる。若い人から高齢者まで。だから、一家で参加したりしている」と話す。

また、チャビやジョルディは、政治的な信条の多様性についても言及した。コーリャのメンバーは、政治的には多様であるが、皆うまくバランスをとりながら、折り合いをつけてやっているという。

　こうした多様性を、コーリャのメンバーはそろって肯定的に捉えている。何人かのメンバーの言葉を借りれば、「全ての人に場所がある」のである。さらにそのような多様性は、一部のメンバーによって、カタルーニャの歴史や社会と結びつけて語られる。チャビは、カタルーニャの歴史を引き合いに出しながら、人間の塔がいかに異文化からの人々を寛容に受け入れているか、熱を込めて筆者に語った。カタルーニャは、ロ

ーマ、西ゴート、フランク、イスラム、アラゴン、カスティーリャと、歴史的に様々な文化を受け入れてきた。常に他の文化を受容してきたことは、人間の塔が今、様々な出自の人々を受け入れていることと共通しているという。「だから、僕たちはとても開放的だ」とチャビは語った。ジョルディも、「人間の塔は、今まで存在してきたものの中で、一番寛容で開放的な文化だ」と胸を張る。アントニは、カタルーニャに存在するあらゆる人々を、人間の塔は受け入れており、カタルーニャの統合力の強さを象徴している、と語った。

3) 一つの目的を達成するために協力することと、競争がないこと

多様なメンバーが力を合わせて塔を完成させるという、共通した目的に向かって協力することは、人間の塔の大きな特徴の 1 つである。チャビは、最終的に塔を完成させるのは上に登るメンバーであるが、彼らは下で支えるメンバーがいなければ上に登れないのであり、全員の協力が人間の塔の成功に不可欠だと述べた。各メンバーに自分の場所、即ち役割があり、それを達成することが、塔の完成に繋がるというのである。彼やジョルディは、人間の塔に必要とされる組織的な協力を表すために、コーリャを会社に例えていた。

こうした協力の場は、コーリャ内だけではない。実演の日、同じ場所に集う他のコーリャに対しても、自らのコーリャに対して行うのと同じように協力することが求められる。大体の場合、実演の場においては、複数のコーリャが交代しながら一回ずつ塔を組み立てていく。そして、1 つのコーリャが塔を立てている時、その周囲を他のコーリャのメンバーが支えにいくことが礼儀とされている。そればかりか、時には他のコーリャのメンバーが、支え方を教えることもある。筆者が参加した実演でも、CB のメンバーに、「あなたはこっちじゃなくてこっち」「手はそこじゃなくてここに置いて」と教える他のコーリャのメンバーの姿があった。その上、空いている場所を埋める CB のメンバーがいないとわかると、「だれかここに入って！」と、自分のコーリャのメンバーに呼びかけもしていた。こうした協力的な姿勢から、人間の塔は競争ではない、と話すメンバーもいる。アントニは筆者に、「人間の塔には、競争がない。僕たちが競争するのは、2 年に一度開かれる、タラゴナのコンクール(16)の時だけで、あとは他のコーリャに協力する。人間の塔はスポーツではないから」と語った。「人間の塔はスポーツではない」という語りは、他のメンバーからも聞くことができた。1960 年

代の「競争か協調か」という論争は、少なくとも CB においては、後者への支持が多いようである。

また、多様性を受け入れる懐の深さや協力の重要さは、人間の塔が持つ「人がいればいるほどいい」という特徴を反映している。人が多ければ多いほど、高い塔が立てられるし、塔のバリエーションが増えるという。また、コーリャが活動していくには、塔に登ったりそれを支えたりする身体能力が高い人はもちろんのこと、多様なメンバーを集めて運営していく人々が必要となる。人が多く集まることで、様々な能力を持った人が入ってくるようになり、それぞれの個性や特徴をコーリャに還元するようになる。ジョルディは、CB ではここ 3・4 年、若い人が参加するようになってきたという。一方、「人間の塔は、たくさんの犠牲が要る。週 2 回の練習と、週末の実演と。若い人には大変なこと」なので、やめてしまう人も多いと述べる。そのため、常にメンバーを募集している状態である。

メンバー間の協力という特徴を、カタルーニャ独立のメタファーとして捉える声もあった。カルマは、「人間の塔は、一つの目的のためにみんなで協力する。独立を獲得するのも同じ」と述べた。また、競争がなく平和的な活動であることも、独立運動に似通ったものを感じさせるという。この見方は、オムニウムのセラが示した見方と同じものであり、人間の塔をカタルーニャのシンボルと見なしている証拠と言えるであろう。

(3) 人間の塔とカタルーニャ・ネーションを結びつけることに反対するメンバー

前項では、人間の塔とカタルーニャを結びつける人々の語りを追った。前項で出てきたメンバーに共通しているのは、全員が独立支持派であり、スペインに対して何らかの強い不満を抱いていることである。それは、前述した経済、教育、そしてアイデンティティについての不満である。アントニは、「他の地域では高速道路は無料なのに、カタルーニャでは税金を取られるから有料だ」と筆者に語った。また、同じく CB に属するカルマは、学生の目線から、「カタルーニャの奨学金を使っているアンダルシアの学生がたくさんいるけれど、彼らは全く勉強しない」と、他の地域に対する不満を述べた。また教育の観点では、カルマを始めとする多くのメンバーが、教育法改正と、それに伴うカタルーニャ語の授業時間削減に不満を感じており、口々に「スペイン政府の圧力だ」と述べていた。また、アントニやアンリックは、「僕たちは、スペイン人

ではなくカタルーニャ人になりたい」と語り、地域ナショナリズムは何よりもまずアイデンティティの問題であるという認識を述べていた。

しかし、上述した見方に反対するメンバーも、少数ながら存在する。彼らは独立運動と距離を置き、独立賛成派が人間の塔とカタルーニャを接合させることに、戸惑いや複雑な思いを抱いている。今回のフィールドワークで、筆者は、その内の一人であるジュアンというメンバーに、詳しく話を聞くことができた。彼は、2012 年までコーリャのキャプテンとして活躍した経験があり、人間の塔を最もよく知るメンバーの一人として、今も様々な人々から慕われている。

ジュアンは、「僕は、（コーリャの中で）変な奴だと感じることがある」と語り始めた。彼は、カタルーニャの文化的独自性に一定の理解を示しているものの、人間の塔が独立派によって政治的に利用されることに納得がいかないという。現在のコーリャの中には、圧倒的に独立主義的な雰囲気がある、とジュアンは語った。さらに、独立主義の雰囲気を受け入れることができず、自分の意見に賛成してくれる人がいても、黙っている方がましだ、と考えてしまうという。ジュアンはコーリャ内で「コーリャのメンバーは真のカタルーニャ人であり、真のカタルーニャ人は独立主義者であるべき」という構図ができあがってしまい、それを支持していない人々を圧迫するようになってしまっていると話した。これは、独立支持者の人々が述べた多様性や寛容さとは、真逆の見方である。

このことを象徴するのが、2012 年のある日、オムニウムから CB に、9 月 11 日のデモに参加するよう要請が届いた時である。ジュアンはその当時、コーリャのキャプテンとして、本部メンバーと話し合って、要請を受けるかどうか決める必要があった。当時の本部メンバーは、デモへの参加は必要ないとして、不参加を決定した。しかし、多くのコーリャのメンバーが、コーリャはデモに参加しなくてはならないとして、本部の決定に異議を申し立てたのである。結局、このことに関してメンバー全員を対象にした投票が行われることになり、その結果デモへの参加が決定した。投票のためだけに練習に来たメンバーもいたという。ジュアンは、こうした雰囲気を不服として、その直後にキャプテンを辞任し、以来何の役職にもついていない。

こうした雰囲気を通して、ジュアンはコーリャのメンバーに対する不信や疑惑を感じるようになってしまった。「『臆病者』とののしられたこともあった」という彼の言葉から、ネガティブな感情が伝わってくる。それでも彼は、人間の塔の活動自体をやめ

ることはなかった。なぜなら、コーリャは彼の居場所であり、彼自身の人生を象徴するものであったからである。
またジュアンは、独立支持派の言説は誤りを多く含んでいると述べた。彼によれば、独立支持派がスペインの悪政の象徴とする高速道路の料金の問題は、誤解によって生じている。彼はこの問題を、カタルーニャ州において高速道路の運営会社が、他の自治州より高い料金を設定しているために起こっていると説明し、スペイン政府が搾取しているわけではないと主張した。また、独立支持派は、差異を主張することによって、スペインに対する優越感や差別意識を煽っていると話し、このような人々の作るネーションには信用が置けない、と話していた。
以上から、ジュアンを代表する独立反対派は、人間の塔にネーションを仮託することに対し、非常に懐疑的であることがわかる。彼らにとって地域ナショナリズムとは、そのことによって、コーリャ内の自由さや多様性を抑圧するような言説なのである。

第５章　結論

１．人間の塔の意味

本稿の目的は、カタルーニャ自治州における地域ナショナリズムの中で、人間の塔がどのような意味を付与されているのかを考察することであった。

そのためにまず、本稿ではナショナリズムとネーションを定義し、ナショナリズム研究を概観した上で、ナショナリズムを研究するためのモデルを提示した。それは社会構成主義を基盤に据えて、他のアプローチも適宜取り入れる、複合的なアプローチである。次いで、ナショナリズムにおいてシンボルが持つ機能を、特にネーションの構成員の視点から整理した。さらに、シンボルを取り巻く言説とは、それにどのような意味を付与するかということであると指摘した。次に、カタルーニャ自治州に焦点をあて、地域主義や地域ナショナリズムと人間の塔が、現在までどのように関わってきたのかということを、民族舞踊とされるサルダーナとの比較において述べた。1960 年代までは、人間の塔とカタルーニャ主義との関係性は希薄であった。しかし 1970 年代、人間の塔は、フランコ後のカタルーニャ地域における民主化や近代化、移民の社会統合、多様なメンバーによる協力という意味を付与されるようになる。一方でフランコ体制による人間の塔への援助から、コーリャのプロフェッショナル化や組織化が進み、現在と同じような組織構成のコーリャが生まれた。このように現在の人間の塔は、カタルーニャ主義とフランコ体制の両者から生み出されたものである。現在カタルーニャ自治州では、人々はよりよい公正な新しい社会を、「独立国家カタルーニャ」に求め、地域ナショナリズムと独立運動を支持し始めた。この欲求は、市民による直接的で新しい民主主義の発露であるとして、正当化された。人間の塔は、カタルーニャのシンボルであり、この理想の社会の価値観を体現するものとされた。そして、人間の塔に、「民主主義」、「社会統合」、「メンバー全員の協力」というもともとの意味に加え、新たに「独立」と「地域ナショナリズムの達成」という意味が付与されるようになった。この意味は、オムニウムなど市民団体が宣伝動画やデモによって拡散させた。政治家もこれを利用し、自らの主張を展開した。

以上から、現在のカタルーニャ社会において、人間の塔は理想の新社会カタルーニャ・ネーションのシンボルであり、「地域ナショナリズム＝民主主義」論の価値観を体

現するもの、という意味を付与されていることがわかる。この認識は、前述した4つの価値観が、「地域ナショナリズム＝民主主義」論に沿えば、地域ナショナリズムを正当化し独立運動を後押しする価値観である、という見方をもとにしている。独立は民意に支えられた新しい民主主義の発露であり、全カタルーニャ住民が協力することで成し遂げられるからである。このことから、独立支持派の人々は、現実味を帯びつつあるカタルーニャの独立という文脈で、人間の塔というシンボルを再構築しているということがわかる。また、人間の塔のもつ特徴と相まって、独立運動そのものも人間の塔に仮託されている。人間の塔の成功は、いつどのタイミングで塔が崩れ落ちるかわからない、という危険と表裏一体でもある。塔は、メンバーの支え方や足の置き方、登り方などの些細なことで、一瞬にして崩れてしまう。「スリル感」は、逆に成功した時、大きな喜びと一体感へと転じる。独立支持派は、このような感情の高揚は、非暴力的で平和的でありながら強烈な独立への願望を伝えようとする、近年の独立運動に通底するものがあると見なしているのである。

以上から独立支持派の人々は、人間の塔の意味を固定化するとともに、現代社会に適合させるため、その意味を変更させていると解釈することができる。

２．人間の塔の理想化とイメージの再生産

それでは、人間の塔にこめられた意味は、どのような言説から生み出されているのであろうか。筆者は独立支持派の人々による人間の塔の理想化が、その言説のレトリックであると考えている。彼らは、人間の塔に見られるとされる、多様性を許容する柔軟さや民主的な組織構成を、理想的な文化として語る。この際、カタルーニャ・ネーションは、ネーションが過去に経験した文化交流や歴史を通じて思い起こされ、人間の塔の多様性と重ね合わせられる。人間の塔の特徴である多様性を、ネーションの歴史や社会と結びつけて語ることは、彼らが人間の塔を通じて、ネーションを実体化していることを示す。また、そのことを誇らしげに語ることで、彼らは人間の塔、ひいてはネーションの正当性をアピールする。さらに人間の塔を通じ、出自の多様なメンバーが、カタルーニャ・ネーションの構成員という「我々」の範疇に組み込まれている。メンバーたちは、差異を前提としながらも、人間の塔に関わっているという一点において、自らと違う他者をカタルーニャ・ネーションの構成員として認知するのである。同時に、人間の塔を構成する要素の中でネーションのイメージにそぐわない

ものは、意識的または無意識的に無視される。例えば、コーリャ間の競争やライバル心がそれに当たる。コーリャ内外の独立支持派の人々は一様に、人間の塔がカタルーニャ人の協調と友和を表しており、競争が存在しないことを筆者に語った。しかし前述したように、競争やライバル心は、歴史的に人間の塔から切り離せない要素であった。さらに現在でも、コーリャのメンバーは実演の際、敵対心を表すことがある。フィールドワーク中の実演の際、筆者はコーリャのメンバーが、他のコーリャについて批判的な意見を述べるのを聞いた。サンティスは、コーリャ間には明らかなライバル関係が存在するにも関わらず、人々はそれらを無視して人間の塔を語る、と述べた［Sentís 1996:103］。またサンティスは、ライバル心と同様に、失敗への恐れや塔が崩れた時の苛立ちや失望といったネガティブな感情も、人間の塔には存在すると述べる［Sentís 1996:104-105］。筆者がフィールドワークを行った際も、こうした感情がメンバーの表情に浮かぶ瞬間を何度も目撃している。例えば、塔が崩れた時、メンバーは一様に落胆と失望をあらわにした。また練習の際、体の一部をひどく踏まれたり蹴られたりしたことで、血相を変えて怒るメンバーもいた。しかし、コーリャのメンバーが、人間の塔のそのような側面を筆者に語ることはなかった。彼らは人間の塔を構成する様々な要素から、民主的で他者に寛容なカタルーニャ・ネーションというイメージに適したもののみを選び取ることで、ネーションの意味を操作しているのである。こうして理想化された人間の塔のイメージに、独立支持派の人々は、カタルーニャ・ネーションを仮託する。理想化した人間の塔についての語りは、独立支持派によって無意識の内に固定化されて流布される。それを繰り返した結果、語りはやがて一つのまとまった言説になる。人間の塔やメンバー自体が神聖化され、カタルーニャ・ネーションという想像の共同体の神話の一部として組み込まれる。この意味において、独立支持派の人々は人間の塔のイメージを再生産しているのである。

３．排除という隠れた意味

一方で､様々な要素の選択によって作り出された理想化された人間の塔のイメージは、必然的にそこから排除される要素を生み出した。例えば、独立反対派の人々の存在がある。この点で、チャビとジュアンの、コーリャの政治的多様性についての語りは、示唆に富んでいる。チャビに代表される独立反対派の人々は、コーリャには政治的な意見を異にする人々も含まれているが、双方をうまく認め合っていると考えている一

方、ジュアンのような独立反対派の人々は、多数派である独立支持派への同調圧力を感じている。チャビの語りは、多数派の人々が同調圧力に気がついていないか、または気づいていても無視していることを示している。ジュアンのように、コーリャ内の政治的な雰囲気に賛成できない人々の葛藤は、独立支持派の人々に理解されてもいなければ、認識すらされていないのである。このことは人間の塔に、「間接的でゆるやかな、しかし明確な排除」という、隠れた意味を付与している。前述した意味とはちがい、この意味は積極的に付与されるものではない。しかしジュアンの語りは、その存在を暗に浮かび上がらせているのである。

筆者は、この隠れた意味の背景には、人間の塔やコーリャのメンバーを、調和のとれた均質なものとして描き出したいという独立支持派の欲求があるのではないか、と考えている。その背景には、カタルーニャというネーションの存在がある。コーリャのメンバーは、カタルーニャ・ネーションのシンボルとして、カタルーニャ人という我々性の意識を基盤に、一つにまとまった同質な存在でなければならない。そうしなければ、均質な構成員を基盤にしたネーションという概念が、崩れてしまうからである。そのためには、このまとまりを分裂させてしまうようなものは、排除されなければならない。そうした排除の対象となるのが、前述した競争心という要素であり、独立反対派である。競争心は、カタルーニャ人としてまとまらなければいけないコーリャのメンバーの間に、一時的ではあるものの亀裂を生み出す。また、独立反対派の存在を認めることは、コーリャ内に政治的対立という、非常に微妙で熱しやすく、一歩間違えればコーリャの決定的な分裂を招きかねない要因があることを、認めてしまうことになる。どちらも、カタルーニャ・ネーションのシンボルとしての均質性を乱すものであり、排除の対象となる。競争心は、それとは反対の意味を持つ、協力や友和という概念を普段の実演に持ち込むことで中和される。また、タラゴナのコンクールという一点に競争心を向けることで、メンバーはこれをコントロールしようとしている。独立反対派の人々に関しては、反対派も含めて我々はうまくやっていると考えることで、彼らの存在がはらむ分裂の可能性を無効化しようとしている。

現在人間の塔が持つ、「間接的でゆるやかな、しかし明確な排除」という意味は、そのままカタルーニャ・ネーションが隠し持つ危険性にも直結している。ジオリは、地域ナショナリズムに下支えされた独立運動は、「他の人々の喜びとは対照的に、苦しみと恐れをも生み出している—そして彼らは、この共通のプロセスの中に自らの居場所が

なく、客観的にも主観的にも、多数派の国の新しいプロジェクトからおいていかれている、と感じている」と述べ、地域ナショナリズムによって反対派が排除されている社会の現状と、その人々の葛藤を指摘する［Giori 2013:824］。奇しくもジュアンの事例は、人間の塔がネーションのシンボルとして、この意味すらも身の内に含んでいる、ということを表している。

独立支持派の人々が口にする、公正な新社会への欲求は、確かに民主的なものであろう。しかし、それに対して反対意見を唱えることも、また民主主義の権利である。そうした人々が抑圧され苦悩を抱えているという現状は、民主主義の理想とは程遠いところにある。

昨年 9 月の投票では、第 2 党に躍進したのは、独立に反対しスペインとの結びつきを深めることを主張する「市民」党（Ciutadants）であった。このことは、カタルーニャ社会の深い意見対立を明るみに出しているように思われる。民主主義の理論に裏打ちされた地域ナショナリズム、そして独立運動は、はたして真の民主主義をとなりうるのであろうか。

注

(1) カタルーニャ統計局（Institut d`Estadística de Catalunya）のウェブサイト http://www.idescat.cat/economia/inec?tc=3&id=0608&lang=es&dt=201304&x=7&y=4（2015/11/26 参照）より。

(2) カタルーニャ自治州南部、アル・カンプ郡の郡都。成立年代が最も古く実力のある二つのコーリャ、Colla Vella Xiquets de Valls（コーリャ・ベリャ・シケッツ・ダ・バイス/バイスの少年たちの古いコーリャ）と Colla Jove Xiquets de Valls（コーリャ・ジョバ・シケッツ・ダ・バイス/バイスの少年たちの若いコーリャ）が活動する。

(3) カタルーニャ自治州南部、アルト・パナデス郡の郡都。この都市を中心に活動する Castellers de Vilafranca（カスタジェルス・ダ・ビラフランカ/ビラフランカ人間の塔の会）は、実力のあるコーリャとして知られる。

(4) 地域新聞 Ara 紙の 2015 Ara.Castells Rànquing http://www.ara.cat/castells/dades/ranquing（2015/12/22 参照）より。

(5) 人間の塔では、各コーリャが獲得した点数を競っている。その点数は、成功させた塔の難易度と完成度に基づいて決定されている。各実演でコーリャが行った塔の結果に基づき、コーリャに点数が加算されていく。例えば、「8 層の 3 人」が完成した場合は 3680 点、「9 層の 3 人、補強付き」が完成した場合は 6900 点が、コーリャの得点に加算される。この点数によって、人間の塔のランキングが決定する。

(6) カスティーリャ語による詩作が中心であった当時の文壇に反発し、カタルーニャ語による詩作を行おうと、知識人が開いた詩の競作会。「花の宴」と言う名は、中世カタルーニャ貴族の間で行われていた詩の会から付けられた。これは中世と当時の時間的連続性を意識させる上で、重要な仕掛けとなった。

(7) 最初に現在のカタルーニャ自治州に相当する地域を統治した、フランク王国の家臣であった家系。988 年にはフランク王国から独立し、以来 15 世紀までこの地域を支配した。最盛期には、地中海をまたいだ広大な領土を築き、また海運業で莫大な富を成した。その後カタルーニャはハプスブルグ家により支配されるが、たびたび隣国のカスティーリャ王国や、ブルボン朝フランスの干渉を受け、1714 年 9 月 11 日、バルセロナの陥落により「独立を喪失」したと考えられている［田澤 2000］。

(8) バルセロナ辺境伯領においては、13 世紀に、世界最古の身分制議会の一つと言われる「カタルーニャ議会」が開かれ始めた。この議会は貴族や富裕な商人から成り、王権を制御する役目を負っていた。また、百人議会と呼ばれる市民からなる議会も開かれていた。カタルーニャ主義者は両議会を、民主主義の発露であり、カタルーニャの優位性の証拠であるとして称賛した［田澤 2000:91-93］。

(9) カタルーニャの北部から南部を通る道に人が並び、両側の人の手を握って「人間の鎖」を作る、というデモンストレーション。ソ連からの独立を主張してバルト三国の住民が作った「バルトの道」に、インスピレーションを受けたとされる。道は、ローマ帝国時代の軍用道路が再現された［山道 2015:9-10］。

(10) カスティーリャ語とは、公用語である標準スペイン語を指す。カタルーニャでは、標準スペイン語を指すとき、スペイン語（espanyol）とは言わずカスティーリャ語（castellà）と言うので、本稿でもそれに従うものとする。

(11) オムニウム・クルトゥラウが中心となって作成した宣伝用動画「Catalans want to vote - Human towers for democracy」https://www.youtube.com/watch?v=m8YTJPJQevw（2015/11/28 参照）より。

(12) 巨人人形とは、伝統芸能の一つで、王や女王をかたどった 2・3 メートルの人形を、中に入った人々が軽快なステップを踏みながら動かす、ユーモラスなパフォーマンスである。

(13) この旗はサニェーラ・アステラーダ（sanyera estelada、“星付きの旗”の意）と呼ばれるもので、カタルーニャ州旗である、黄色の地と赤の縦線 4 本の旗に、青い三角形と白い星を組み合わせた意匠である。独立支持派の旗として使われるもので、近年町のあちこちで見られるようになった［山道 2015:13］。

(14) “In! De! Independència! In! De! Independència!”（イン・ダ・インダパンダンシア）というコール。インダパンダンシアは、カタルーニャ語で独立の意。

(15) この時の会話で、多様性の例として上がったのは、スイス人、ルクセンブルク人、メキシコ人、ポルトガル人、モロッコ人、アメリカ人、イギリス人であった。

(16) カタルーニャ東部の都市タラゴナで行われる、人間の塔のコンクールを指す。通常の実演とは違い、塔の構成と完成度に応じて全コーリャのトップを決定するため、コーリャ同士のライバル意識がとても高揚するイベントである。

参考文献

アンダーソン、B.

1987　『想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』白石さや・白石隆訳、リブロポート。(Benedict Anderson, 1983, *Imagined Communities: Reflection on the Origin and Spread of Nationalism.* London: Verso.)

Bertran, J.

2011　Els casrells a Catalunya: de prestic cultural a patrimonio huma del segle XXI. In Ayat.X et al. (eds.), *Castells i Castellers. Una voluntat Col.lectiva*, pp. 22-45, Barcelona: Lunwerg.

Clua i Fainé, M.

2014　Identidad y política en Cataluña: el auge del indipendentismo en el nacionalismo catalán actual. *Quaderns-e* 19(2): pp.79-99.

エリクソン、T.

2006　『エスニシティとナショナリズム：人類学的視点から』鈴木清史訳、明石書店。(Thomas Hylland Erikson, 2002, *Ethnicity and Nationalism: anthropological perspectives*. London: Pluto Press.)

Gioli, P.

2012　*Hacer Castells, construir nación. Castells, modelo festivo y catalanismo*: Universitat de Girona に提出された博士論文。

2013　Catalanisme Cultural: reptes i possibilitats de construir una nació en democràcia. *Revista Afers: full de recerca i pensament* 76, pp.807-824.

2014　Les etepes del mòn casteller. Construcció d`un mòn de les lògiques del seu funcionament. *Revista d`Etnologia de Catalunya* 39, pp.160-167.

Hall, S.

1992　The Question of Cultural Identity. In S. Hall and T. Mcgrew (eds.), *Modernity. An Introduction to Mocern Sicieties*, pp.596-634, Cambridge: Polity Press.

ホブズボウム、E

1992　「伝統は創られる」E、ホブズボウム・T、レンジャー『創られた伝統』前川

啓治・梶原景昭訳、紀伊国屋書店。（Eric Hobsbawm and Terence Ranger(eds), 1983, *The Invention of Tradition*. Cambridge: Cambridge University Press.）

原百年

2011 『ナショナリズム論：社会構成主義的再考』有信堂高文社。

2014 「ナショナリティ生成の分析枠組み：社会構成主義と他のアプローチの接合」『山梨学院大学法学論集』72: 310-330。

金容賛

2012 「近代朝鮮におけるナショナリズムと『シンボル』の機能に関する一考察 ―独立協会の活動と独立門をめぐって（1896-1899）―」『立命館国際地域研究』36: 189-205。

奥野良知

2015 「カタルーニャにおける独立志向の高まりとその要因」『愛知県立大学外国語学部紀要（地域研究・国際学編）』47: 129-166。

Prat, J.

1991 El nacionalismo catalán a través de los demarcadores de identificación simbólica. *Revista de Antropología Social*: 231-239.

Sentís, E.

1996 Por i Perill: vivencies dels castellers. *Revista d`Etnologia de Catalunya* 9, pp.100-115.

Soler Costa, R.

2009 La lengua catalana en la construcción de la identidad social de Cataluña: análisis de este nacionalismo linguístico. *Revista Elecrtónica Interuniversitaria de Formación de Profesorado*, 12(4), pp.123-128.

立石博高

2002 「カタルーニャ・ナショナリズムの歴史：民族精神から言語＝文化的同化論へ」立石博高・中塚次郎編『スペインにおける地域と国家：ナショナリズムの相克』pp.99-143、国際書院。

田澤耕

2000 『物語 カタルーニャの歴史 知られざる地中海帝国の興亡』中公新書。

Vallecillo,L.

2006　*Castellers*. Barcelona: Mina.

山道佳子

2015　「カタルーニャの道」『季刊民族学』152: 6-19。

Summary

The Function of Symbols in regional nationalism; In case of "castells" in Autonomy of Catalunya

In these days, it is shown that there are many regional movements that require their independence of nation-states, regarding their region more important than nation-states. One of those movements occurs in Autonomy of Catalunya, Kingdom of Spain. In this Autonomy Catalonian regional nationalism, called Catalanisme in Catalonian lungage, is activated since 2010 because of the political and economic dissatisfaction that has Catalonian society against Spanish Government. In this article the concept of nation is defined as a notion made, not a reality, by the people who consider themselves to belong in a particular social community. The members of a nation consider that their nation has specialty, particular value and political sovereignty. Also regional nationalism is defined as the discourse that regards their region, not nation-state, as a nation. In time of discussing about this theme, we have to focus on the symbols of naion, which unite their members and show them the reality and legitimacy of their nations. Also the members manage the significance of nation through the symbols.

The aim of this article is to clarify the significance of "castells", human tower in english, in this movement. Castells is considered as the traditional performing art in Catalonia and has strong relationship with recent regional nationalism. Through the 19 and 20 century castells was considered to be dangerous sports in the rural area, not in urban area. However, since 1970s castells has become one of one of the symbols of Catalonia. Then the Catalonians started to give a castells the four significances: democracy, social integration, modernity and corporation of all members.

The achievement of this article is that it reveals the new three significances of castells in the recent movement. The fieldwork that the author did in Barcelona shows that the recent Catalonian regional nationalism gives a castells the new significances: the achievement of independence and the symbol of new ideal Catalonian society. Those are put as the goal of those four mentioned significance. This concept is supported and spread by the supporters of regional nationalism. The members of civil organization and politicians who push the

regional nationalism utilize as the strategy the image of castells to express their political stance. Some members of Colla, also support the regional nationalism and independence, explain to the author how castells represents the Catalonian culture, society and history: for them castells is the representative of the nature of Catalonians, diversity and social integration of Catalonian society and the collaboration of all members. This discourse is strongly tied with the concept of independence of Catalunya, which is regarded as the result of the collaboration of diverse members united with nature of Catalunya. On the other hand, there are another members of Colla, who cannot agree with this political relationship between castells and regional nationalism. One of them explains that he feels uncomfortable with actual situation because of the atmosphere of support to the independence. His existence reveal the third hidden significance of Catalonian Nation, which is exclusion of those who disagree with the idea of regional nationalism.

謝辞

5 年間に渡る学生生活の集大成として、この卒業論文を書き上げられたことを、本当に嬉しく思う反面、長い間考え続けてきたテーマとこれを機に離れることに、さみしい思いを感じてもいる。
この論文を書き上げるに当たり、様々な方々から多大なご尽力を頂いた。私がこのテーマを卒業論文とした理由を振り返りながら、ここで改めて感謝の意を表したい。

私がナショナリズムという現象に興味を持ったのは、大学 1 年の終わり頃だった。当時、民族紛争後の平和構築に興味を持っていた私は、そのことを敷衍して、そもそもなぜ紛争が起きるのかということにも興味を感じ始めた。そして、民族紛争の裏にある、民族主義やナショナリズムの力強さ、そして恐ろしさを知った。人間は、自分が所属する共同体を守るためならこんなこともできてしまうのかと、調べながら愕然とした記憶がある。それならばなぜ、人間はネーションや民族という概念に惹かれ、ついにはそのために命まで投げ出すようになってしまうのだろうか。そしてなぜ、自らのアイデンティティのためならば、今まで親しくしていた人々を、殺害することもいとわないようになってしまうのだろうか。私の興味は次第に平和構築を離れ、ナショナリズムや民族主義に向かっていった。転機となったのは、留学したスペインでの経験であった。今までなじんできたものとは別の文化に入り込んだことで、私は自分が日本人であることを、強く実感してしまった。「してしまった」と書いたのは、そのことにこだわりすぎたせいで、一時スペインが嫌いになりかけたからである。また、異国では自分が「日本人代表」として見られ、扱われることも、「私は日本人なんだ」という思いに拍車をかけた。今になってみれば、自分の中の「ナショナリズム」のようなものを、大切にしすぎたのだと思う。幸い、その後仲良くなったスペイン人の皆さんのおかげで、スペインは私の大切な場所となった。ナショナリズムなんて、とっとと捨てていればよかったのに、と今になって思う。でも、それを捨ててしまったら、自分までどこかに捨ててしまうようで、怖かったのだろう。そして思えば、そうした思いは、この卒業論文を執筆する上で、非常に重要になったのである。

また、バルセロナへの旅行は、本稿を執筆する直接の原因となった。バルセロナに行ってまず驚いたのは、気候の違いであった。私が留学していた町は、カスティーリ

ャの典型的な田舎町（つまり、カタルーニャと『仲の悪い』地域）で、のどかだがどことなく閉鎖的な雰囲気を持っていた。そんな町から出てきた私は、バルセロナの持つ開放的で洒脱な都市文化の雰囲気に、魅了されてしまったのである。その次に、いろいろな習慣の違いが目についた。まず、バルコニーからぶら下げてある、カタルーニャの旗。通常スペイン人は、スペイン国旗は極右の象徴であるとして、バルコニーからぶら下げるなんてことは絶対にしない。それがカタルーニャに来てみたら、カタルーニャの旗だらけであった。さらに、思ったほどカタルーニャ語とスペイン語の差が激しく、見ればなんとなくわかるけれど聞いてもよくわからない。ここには留学先とはなにか違うものがあると感じ、漠然とした興味を持ったのである。

この興味をさらに広げてくれたのは、伯父の友人であるエウラリアさんご家族、エウラリアさんの妹であるパトリシアさんとそのご主人のアルベルさんのご家族や、そのご友人である。エウラリアさんは、私がバルセロナに旅行に行くたびに、家へ招いてくれ、私の相談に乗ってくださった。また、何かわからないことがある時には、いつでもメールでアドバイスをしてくださったり、資料を送ってくださったりした。また、パトリシアさんやアルベルさんは、わたしをディアーダのデモに連れ出してくれたり、人間の塔について解説したりしてくれ、非常に親身になって助けてくださった。二人のお嬢さんであるライアさんも、本稿執筆のヒントになるようなアドバイスを、たくさんしてくださった。さらに、私をカタルーニャ語の世界へ引き込んでくれたのは、エウラリアさんの従妹であるエウラリアさんであった。彼女がつきっきりでカタルーニャ語を教えて下さらなかったら、主要な参考文献となったものがいくつか読めていなかっただろうと思う。

また、カタルーニャへの漠然とした興味が形になったのは、両親と伯父のおかげである。父（私に負けず劣らずスペイン好き、そしてカタルーニャびいきである）がバルセロナを旅行した時に撮影した、人間の塔の映像であった。サグラダ・ファミリアをバックに、青いシャツの集団やピンクのシャツの集団が、次々に塔を組み立てては降りていく。理由はわからないが、一目見て、これを研究したいと思った。また、父と一緒に行った母（スペイン好きなのは、父と私と同じである）から、そのそばで独立支持派が署名活動を行っていたと聞いたと聞いた時、論文のテーマが決まった。二人のおかげで、私は興味を持って取り組めるテーマに出会うことができた。卒業論文だけではなく、大学生活のすべてにおいて私を支え、一番の理解者となってくれた。

そして、今から 30 年前ほど前にスペインに滞在し、エウラリアさんパトリシアさん姉妹と知り合い、いまだに連絡を取り合っている伯父がいなければ、私たち 3 人がカタルーニャに興味を持ち、お二人と知り合うことはなかっただろう。縁の不思議さを、つくづく感じた論文執筆であった。

そして、フィールドワークをさせて頂いた Castellers de Barcelona の皆さんにも、心からお礼を申し上げたい。いきなり練習に参加した外国人を、戸惑いもなく受け入れ、いろいろと声をかけて頂き、たくさんの質問に倦むことなく答えてくださった。中でもジョルディさん、チャビさん、カルマさん、アンリックさん、ジュアンさん、パウさん、アントニさんは、快くインタビューを引き受けてくださった。気に障るような質問でも笑顔で答えてくださり、本当に感謝するとともに、この答えを責任をもってまとめなければならない、と背筋の伸びる思いであった。結果、コーリャの皆さんからなんといわれるかわからないような結論になってしまったが、様々なメンバーの意見を組み入れた結果として、ご容赦いただきたいと思っている。また、お忙しい中時間を割いてインタビューに応じてくださった、オムニウムの代表マルセ・セラさんにも、この場を借りて感謝したい。

また、バルセロナでのフィールドワークに関して、首都大学東京博士課程の岩瀬裕子さんに、たくさんのアドバイスをいただいた。お会いした際は、フィールドに入ったばかりの私の緊張を、優しい言葉でほぐしてくださった。また、この論文で多数引用した文献も紹介してくださり、本当に感謝している。また、岩瀬さんを紹介してくださった大学院ゼミの先輩の方にも、改めてこの場でお礼を申し上げたい。

そしてなにより、大学生活で一番お世話になったゼミの皆さんには、感謝してもしつくせないほどである。

筑波大学人文社会科学研究科の関根久雄教授には、二年間に渡るゼミ活動においても個人面談においても、優しく熱のこもったご指導を頂いた。ゼミでは私たち学生の意見に耳を傾けてくださり、個人面談では私のとりとめのない話をじっくりと受け止め、とても的確なアドバイスを下さった。すぐに堂々巡りに陥ってしまう私にとって、おおらかに、そしてユーモアをもってコメントをして下さる先生の存在は、まさに「駆け込み寺」であった。

また、一緒にゼミを行ってきた先輩、同期、後輩の皆さんにも感謝したい。いつも温かく和気藹々とゼミ生活を送れたのは、同じゼミ生がいたからこそであった。そし

て、常に鋭い指摘をしてくれる皆に負けないようにと、頭をフル回転させてゼミに臨んだことは、私の思考力を鍛え、知識を深めることにつながった。あの大学生活一楽しかった時間が、もう過ごせなくなると思うと、さみしさがこみあげてくる。それほど、皆の存在は、私にとって支えであり励みであった。

拙い言葉であったが、皆さん一人一人に感謝の気持ちが伝わればと願っている。以上をもって謝辞とし、卒業論文の結びに代えさせていただきたい。